
魔法少女リリカルなのは～最弱の転生者～

Syura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜最弱の転生者〜

【Nコード】

N1895U

【作者名】

Syura

【あらすじ】

落ちてきた鉄骨から親子を救い死んでしまった弱野 強志は不思議な声を聞いた後魔法少女リリカルなのはの世界に転生させられる

そこでおこる数々の事件それに強志は巻き込まれてしまう

ブログ（前書き）

どもSYURAです

友達が書けっつてうるさくて

でも書きたかったのは本当ですよ？

あとアンケート終了です

今回も一票も来なかった…

プロローグ

俺は、弱野 強志

あだ名はザコ、もしくはリア充

よく不良にからまれたり

なぜか女の子に囲まれたりするたぶん普通の中学生

そしてある日僕は工事現場の前で小さい子がお母さんと歩いているのを見かけた

(微笑ましいな)

そんな事を考えているとその親子の上の鉄骨が落ちてきた

近くにいたため2人を突き飛ばしたはいいが…

鉄骨に潰されてしまった

その時不思議な声が聞こえた

(死ぬには若すぎる)

違う世界に転生してやろう)

その声の後意識を失った

プロローグ（後書き）

さてさてただのプロローグですよ？

さあ！死んでこい！強志！

強志

「何で死ななきゃいけないんだよ！
ていうか死んだよ！」

見た目？

男の娘（笑）

ついでに性格はネタ多めですよ？

今回はそんな事しませんでしたけどね

第一話 マジですか…(前書き)

第一話!

この先の展開?
考えてません

第一話 マジですか…

強志

「ん…ここは？」

目が醒めると全く知らない場所にいた

強志

「森？」

何か不思議な所だなあ

(助けて！)

………やばいやばい、幻聴なんて…
ゲームのしすぎかな？

この頃セリフだけのシーンで声が聞こえてくるし

まあ、とりあえずすべき事は

強志

「家に帰ろう」

でもどっちに行けばいいのやら…

ん？

(フワ)

強志

「……………」

後ろを向くとそこには

強志

「尻尾？」

何ですか？虎ですか？

怖いなあ…

恐る恐る下を向くと

強志

「……………虎であつて欲しかった……………」

俺のだった

何で俺に尻尾はえてんの？

まあ、取りあえず歩いていくしか

(カサツ)

強志

「何だ!？」

……………葉っぱ……………でも

強志

「位置がちょっと高いようにな……………」

も、もしや…

(ピョロン)

耳だ…

しかも猫の

これじゃ目立つな…

しかたない…

(キユ)

部活の後だったからタオル持ってたんだ！
だからそれを巻いたけど…

強志

「ちよつと窮屈だな」

取りあえず今日はここがどこなのかを聞いて
その後どこか泊めてくれるところを探そう

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ここがどこなのか聞くために町を歩いていたのだが…

「あんた見ない顔だね

越して来たのかい？」

強志

「ええ、まあ」

「そうかい、大変だねえ」

だからなんなんだ…

ここで1つ問題があった

それは…

地名を知らないということは
誘拐されてここに来た
もしくは、記憶喪失の可能性がある
みたいな事になりかねない

よってここがどこなのかは分からないままということだ

強志

「困った…非常に困った…」

どうする？アイル

しまった、古いネタをやってしまった
とりあえず携帯を

(がさがさ)

あつたあつた、ん？メール？
迷惑メールかな？
しかし！それでも確認するのが俺！

(弱野 強志くんへ

君を魔法少女リリカルなのはの世界に飛ばしました

何もないと不便なので
猫になれる能力と猫と同じような身体能力をプレゼントします
猫耳と尻尾は気にしないでください

B Y 神)

何ですか？
どういうことだ？
訳が分かんないんですけど？

(ピピピ)

またメールか…

(気になることがあつたらメールしてください
後君のカバンにやくにたつものを入れておきました使ってください

ついでにこの携帯は私の所以外にはメールや電話はできません

BY神

やくにたつもの？

(ガサガサ)

これかな？

見たことのないネックレスが…

(こんにちはマスター)

強志

「喋った！」

剣のような形をしたアクセサリー付きのネックレスが喋った！

なんかやたら説明口調だな…

(((ジ)))

なんか目立ってる…

色々話聞きたいし

さっきの森に行こうかな？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

強志

「はあ…はあ…」

(マスター、名前をつけてください)

走ったので疲れてるんですが…

強志

「名前？」

(はい、私にはまだ名前がないので)

名前っていつでも…

ん？そっだ！

強志

「ガンブレードってどう？」

(……シンプルですね…)

F のスコルの武器だ

スコル は好きなキャラだったから

(まあ、悪くはないですね)

強志

「じゃ、決定」

(フムフム)

メールか…

(名前決めてあげたみたいだね)

なぜに知ってるし…

(君の住む家は手配している)

気が利くな

(じゃ、高町家の皆さんによろしく)

なんだって？高町？

ようするに居候？

(ピピピ)

またメール…

(言い忘れたけど猫を預かってくださいって言うてるから猫になつてから行ってね

あと、ガンブレード(笑)に物を収納できるようつにしてあるからね

(笑) 付けんなどちきしょう！

ガンブレード

(では荷物を収納しましたので行きましよう)

わお、いつの間にか荷物が消えてる
すげえなこいつ

強志

「姿変えるって言っても…
こつかな？よっ！」

普通にできました〜（チャンチャカチャカチャカチャン）

パクリとか言うな

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ガンブレード

（ここですね）

でかい…

もしかしてお金持つい？

やった！鰹節食べ放題！

猫みたいとか言うな

猫だけど…

「どうしたの？」

もしかして君が家に来るって言ってた猫？」

ちびっ子ツインテール登場

とりあえず中に入れてもらうか

強志

「にゃあ」

どうだ！渾身のものまね！

猫だけなら誰にも負けねえぜ！

「入りたいの？じゃ入ろう！」

我、侵入に成功せり

ガンブレード

「マスター、変なことしないでくださいよ？」

うお！？

いきなり頭の中に声が！

ガンブレード

「念話です

マスターも意識すればできますよ？」

んじゃ試しに

強志

「そんな装備で大丈夫か？」

ガンブレード

「大丈夫だ、問題ない

って何言わせるんですか」

ガンブレードってノリがいいな

まあ、とりあえず成功だな

「ん？なのは、そのこは…」

なのは

「家の前にいたの」

なんかイケメンが出てきた

「そうか

真っ黒な毛並みと、ネックレス
間違いないな

こいつがれいの猫だ
さ、入れ」

お邪魔

この時俺は知らなかった

あんなに過酷な毎日をおくるだなんて

ガンブレード

「マスター、顔が気持ち悪いです」

強志

「え？マジで？」

ガンブレード

「はい、ニヨニヨしてます」

猫の表情なんてよくわかるな…

俺の過酷な日々はここから始まった

第一話 マジですか…（後書き）

はい、どうでしたか？
ネタが多い方ですね

僕の小説はネタが少ないですから

そして1つ問題が！

リリカルなのはの話殆ど知らないという事実！

友達にやろうぜ！って言われてそのまま…

とりあえず

まりもの方もよろしくです

第二話 心の友（前書き）

遅くなりました
すみません

YouTubeでアニメ見ながら書いてるので
原作知識皆無ですから

は？なにこれ？

みたいなことがあるかもしれません

第二話 心の友

高町家に居候したその夜

(たった たった)

なのはが走って外に行った

強志

「なんか面白そうだな」

ガンブレード

「マスターは好奇心旺盛ですね」

強志

「褒めるなよ」

ガンブレード

「褒めたつもりはありません」

(. . .)

とにかくLet's go!

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

なのはを追って行くと動物病院にきた
すると

(バキ)

木が折れた

強志

「あれなんだ？」

ガンブレード

「わかりませんね」

ついでに人型だ

猫耳 + 尻尾あるけど…

ん？なのはが出てきた

なのは

「あれ？あなたは？」

(ウオオオオ！)

強志

「なんかヤバげだな…

俺が足止めする！

早く逃げろ！」

なのは

「え！？でも…」

強志

「行け！」

なのは

「はい、ありがとうございます!」

一回言ってみたかったんだよ

ガンブレード

「来ます!」

(オオオオ!)

強志

「よし! 迎え撃つ!」

なのは

「がんばってください!」

まだいたのか…

とりあえず!

必殺!

(フツ)

なのは

「消えた!？」

(アア!?)

強志

「おせえ！
猫パンチ！」

（ボヨン）

あれ？

（オオオオ！）（ガスッ）

強志

「あ~~~~~れ~~~~~」

100mぐらい飛びそうな勢いで殴られた

なのは+

「弱っ!?!」

言われると心が痛い

強くなるう、そう決心したしだいで（チュドーン）ギャース

落下

痛い…でも死んでないのが不思議だ

（ムヒムヒ）

携帯？

ガンブレード

「どうぞ、マスター」

そっぴゃ携帯つてお前に預けてたな
ナイス、ガンブレード
えーとなになに？

（一応不死身だよ
痛みは感じるけどね

まあ、ガンバレ）

ひどいッス

痛覚も麻痺させてほしかったッス

ガンブレード

「とりあえず加勢しに行きましょう！」

強志

「そうだな」

急いでいったのだがちよつと遅かったようで
ついたら警察が来て

さらになんか町がボロボロだったため

俺がやったと思われて連れて行かれそうになったが何とか逃げた

今の速さならF1にすら負けない自信があるぜ！

とりあえず姿を猫に変えて高町家に帰った

そして俺の布団（猫用）があるなのは部屋に行った
そこには

強志

「なぜにいるし」

さっきのフェレットがいた

ガンブレード

「どうやらここに住むようですね」

強志

「それより猫はフェレットを食べるというのに
同じ部屋とか動物への知識の無さがうかがえる」

またつく…食べちゃっぞ？

「ん…わっ!？」

あなた達は!？」

強志

「この家の居候です
じゃあ、お休み」

「ちよ、ちよっと待って!」

強志

「なに?眠いんだけど」

あと10時間ぐらいしか起きていられないよ

え?長い?

ナンノコトデスカ？

「さっきは助けてくれてありがとう」

なぜにバレたし…

強志

「何でわかった？」

「耳と尻尾、それにネックレスが同じだから」

そういやそうだ

ここまで真っ黒な毛並みで

さらにネックレスしてる猫なんてそうそういない

強志

「べつにお礼を言われるようなことはしてないぞ？
パンチして返り討ちにされただけだ」

「でもその間になのはに魔法を教えることが出来ました」

あの短時間ならべつに意味ないと思うのは俺だけか？

ガンブレード

「マスターは何もしてませんけどね
どこるか邪魔しかしてません」

強志に42042ダメージ！
死におよぶ

強志

「俺の見方はこのフェレットだけか…」

ガンブレード

「ですね」

泣ける…

強志

「お前、名前は？」

「え？ユーノです」

強志

「これから俺達は心の友と書いてしんゆうだ！」

ユーノ

「はいいい！？」

その後一晩中話し続けた

結果

向こうも心友として認めてくれた

ガンブレード

「キモいですね」

強志

「お前って意外とザックリ言うよな」

ガンブレード

「自分の意志ははっきりさせた方がいいと教えられましたので」

誰に？

そして時は過ぎて日曜日

なのはにも俺があのとときの奴だつて話して

なのはとともにユーノに魔法を教えてもらってきたのだが…

強志

「俺だけ上達が遅いのは気のせいかな？」

ガンブレード

「マスターには才能がありませんからね」

こいつこんな奴だったっけ…

なのは

「何でクロさんは上達が遅いのかな？」

なぜか俺の名前がクロになつてる件

ユーノ

「クロさんはスピードに特化してるから攻撃系の魔法は苦手なんだよ」

クロ（笑）

「スピード特化ならヒットアンドアウェイが基本かな？」

ユーノ

「そうなりますね」

よし、ならガンブレードにあの形になってもらって正解だ
スールのガンブレードはヒットアンドヒットアンドアウェイぐら
いがちょうどいい武器だから

あの連続攻撃の速さ！

そこに痺れる！憧れる！

クロ

「じゃあ行くか」

なのは

「そうだね！」

今日はサッカーの試合を見に行くんです

何でもなのはのお父さんが持ってるチームだとか…

ドンだけ金持ちだよ…

(たった)

ん？あの子が持ってるのって…

クロ

「ねえきみ」

「え？はい」

クロ

「その持ってるやつ見せて」

「は、はい」

やっぱりなのは達が集めてるじゅげむシールド？
なんか危ないらしいし…
仕方ない

クロ

「これと交換しない？」

かばんに入ってたダイヤモンド

その後メールが入って、困ったときに使えたとき

「うん！いいよ！」

素直な子は大好きです

「じゃあねー！」

さて向かうとしますか…

（（わあああ！））

終わったようだ

結果はなのはのお父さんが持つてるチームの勝ち
その祝いではなのはの親がやってる喫茶店に来た

クロ

「そっぴやなのは」

なのは
「どうしたの？」

えーと…

あれ？

クロ

「いやなんでもない
先、帰るな」

なのは

「え？うん」

やばい、ひじょうにやばい
なくしちまった…

どこでなくしたんだっけ？

たしか受け取ってガンブレードに…

クロ

「わたしたよな？」

ガンブレード

「もらってません」

ということとは…

クロ

「おら知ーらね」

ガンブレード

「無責任ですね」

それが俺！

暇だな…

ビルの上で日向ぼっこでもしようかな？

第二話 心の友（後書き）

やっちまった

まさかの役立たずスキル

これからはセリフの上の名前は通称のほづを書きます
クロ〓強志だと思ってください

さてさて次はどうしようかな？

第三話 あれ？お花畑が…（前書き）

タイトルに意味は…

たぶんありません

すいませんね

遅れてしまって

原作知識皆無すぎるので動画見ながら書いているんですが
なかなか見れる時間がなくてですね

その分少し文字多めです

第三話 あれ？お花畑が…

ク口

「A a a a a a a a a a ! !」

なぜ叫んでるのか？

理由はもう少し前に戻ったらわかると思う

・：*：・：。：。：*：・：。：。：。：。

ク口

「ん…ふああ…あれ？」

目が覚めると木？の上にはいました

何ではてなかっていうと

ク口

「形きもっ」

形がおかしい

しかもなんか枝に挟まれてるわけです

ク口

「どうにかして抜け出せ………ないな」

ぎゅっちり挟まれてる次第です、はい

ク口

「ガンブレード、どうしょ？」

ガンブレード

「とりあえず横を見てください」

横？そしてなぜ念話？

クロ

「……いつぞやのサッカー少年」

なぜここにいる？

そしてなぜ光に包まれている？

ん？なんか飛んでる…

桃色の…

クロ

「光？」

ガンブレード

「なのはさんの物のようですね」

何かあったのかな？

間違いなくこの木だけど

ガンブレード

「マスター、あちらを」

クロ

「え？……なのは発見

は、いいんだけど……」

先端が桃色に光ってるレイジングハート（形が違うよっな？）をこ
つちに向けてるよっな…

クロ

「ガンブレード、俺の目に狂いが無ければ
あの人こっちに砲撃しようとしてない？」

ガンブレード

「しばらくお待ちください」

待ってる余裕ねえっす

ガンブレード

「出ました

矛先は左1m」

左？

そんなとこ光に包まれた少年しか…

クロ

「まずいぞガンブレード」

ガンブレード

「そうですね」

クロ

「少年が女の子に抱きついてる」

ガンブレード

「は？」

青少年育成法だっけ？に反する行為だと思っ

クロ

「お2人さん、お熱いのはいいけどもう少し場所を（ズオオオオオオオオ！）」

なんか飛んできましたよ？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

そして現在にいたるわけで（ズドオオオオ！）

クロ

「不幸だああああ！」

その時ガンブレードはこう思ったらしい

ガンブレード

（理不尽だ…）

マスターがしっかりしていれば…

マスターが屋上で寝なければ…（）

その後ガンブレードの口調がきつくなったのは言っまでもない

なのは

「ジュエルシード、封印！」

なのはさん

10Lシートを封印するのいいけどこっちも回復してつかあさい

なのは

「あれ？クロさん!？」

どうしたの!？そんなにボロボロで!」

あなたのせいです

なのは

「とにかく病院に行くの!」

レッツ病院

なんてのはゴメンだ

クロ

「大丈夫、すぐ直るから」

なのは

「そうはいかないの!」

— () —

聞き分けない子は嫌いですよ?

なのは

「さあ、行くの!」

なのはさん病院に連れて行くなら肩貸してください

えりの後ろつかんで引きずらないで

病院行く前に手遅れになるから

ユーノ

「なのは、クロさん白目むいてるよ?」

なのは

「え?にやあああ!??」

大丈夫!??」

我が心友よありがとう

もう少しで天使でピーツな世界に旅立つところだったよ

え?わからない?

俺も自分でなにいつてんのかさっぱり

なのは

「今すぐ連れて行ってあげるからね!」

なら同じ過ちを繰り返さないでください
苦しいです

なのは

「ついたの!」

え?早いなあ

近いところでも徒歩30分は……

なのは

「さ、入るよ」

なぜに動物病院

俺は今人型だ

ユ一ノ

「なのは、いまクロさんは人型だよ？」

いいこと言っぜ、心友

ユ一ノ

「猫型になってもらってからじゃなきゃ」

前言撤回！

即刻旋回！

能力全開！

脱兎のごとく！

N I G E L U !

なのは

「逃がさないの！」

痛い痛いツス

バインド食い込んでる

ちよ、逃げませんから

これ解いてえ！

なのは

「はやく猫になるの」

わかったよ！

わかりましたよ！

なればいいんでしょ！？なれば！

クロ
「クルリンパ」

大变身！

なのは

「じゃ、入るの」

選択肢を間違えた

意地でも変身しないべきだった

俺のこの先オワタ＼（＾o＾）／

その後？超してみた

え？何がつて？傷が

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

時は過ぎて夜

クロ

「なあ、ユーノ」

ユーノ

「どうしたの？」

クロ

「理不尽だ…」

ユーノ

「まあ…頑張つて？」

なぜに疑問系…

とりあえず

クロ

「身体強化の魔法とかない？」

ユーノ

「いらなと思うんだけど…」

まあ、あることにはあるよ？」

クロ

「じゃ教えてくれ」

ユーノ

「でもまた明日ね」

猫もフェレットも記憶力皆無なんだが…

え？人間？

そういう事はご都合主義

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

時は流れまして

ただいまなのはが何かの準備をしています

「なのは、早くしろよ」

なのは

「いまいきまーす」

昨日ユーノに聞いた話だと
友達の家に行くらしい

ネコの姿なら来てもいいって言われたので俺も行くことにした

理由？金持ちらしいんだ！

ネコもいるらしいからネコとしての立ち振る舞いをご教授ねがおう
かとも思ってる

その方が色々便利でしょ？

評論家とかにあつたらバレかねないしな

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

到着！

クロ

「でかい屋敷だな…」

ガンブレード

「そうですね」

そっぴやユーノが言ってたんだけど

デバイス（ガンブレードみたいに魔法を出す補助をしてくれる物）
はしゃべれるのは普通だけど

ガンブレードみたいにししゃべれて念話もできるのは珍しいらしい

クロ

「お前って普通じゃないんだよな」

ガンブレード

「ええ、この姿も偽りの姿です」

へえそうなんだ

クロ

「ってそれマジか!？」

ガンブレード

「はいマジです」

クロ

「どんな姿なんだ？」

ガンブレード

「人です」

容姿にはかなり自身があります」

うわぁナルシストだ

クロ

「頭大丈夫？」

ガンブレード

「失礼ですね」

本当のことを言っただけです」

そこが心配なんだよ

ガンブレード

「ワンピ スのナ さんに勝てる自信がありますよ？」

そこまでいったら美的感覚がイカしてるようにしか思えません
あの人男性票かなり多いからね？

ガンブレード

「まあいずれお見せしますよ」

がっかりする準備をしておこう

ガンブレード

「それより三人とも入っていつてますよ？」

あ、おいてかないでー

中に入って進んでいくと

クロ

「ネコだらけ…」

ガンブレード

「かなり多いですね…」

そこにはたくさんネコがいた

「なのはーこっちだよー」

あれがお友達ですか

この前見たときも思ったんだけどあの髪地毛なのか？
紫ってありえないだろ
しかもメイドまで紫だし

さてどのネコにご教授いただくのかな？

(ヒョコ)

ユーノ…そこにいたのか…
ん？

ユーノ

「キュ…」

ネコに見つかってらあ

ユーノ

「キューー！」

追いかけてられてるし
仕方ない、止めてやるか…

クロ

「おーいやめてや」

「にゃ！」(ザク)

刺さってる刺さってる
つめの手入れ行き届いてますか？
額にザクリですよ？

ユーノ

「ありがとう、助かったよ」

傷は気にならないんですか？

すぐ治るけど…

クロ

「困ったときはお互い様だろ？」

さて、収まったことだし外に行くか…

ユーノ

「キューーーーーー!!」

また追っかけられてるし…

おら知らね

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

さてさて家の周りがかかなり無効まで森とはこれいかに？

超広い…

さて戻りますかな？

ん？

(キラン)

もげるニート？らしき物発見！

クロ

「あれつてもげるニートだよな？」

ガンブレード

「何ですかそれ…」

ジュエルシードです」

それだ！

ガンブレード

「どうやら本物のようですね」

OKOK今度はなくさないように

クロ

「ガンブレード」

ガンブレード

「わかりました」

そしてガンブレードはジュエルキーノ？を回収

できなかつた…

「にゃあああ」

代わりにネコが巨大化した

クロ

第三話 あれ？お花畑が…（後書き）

あっはっは

やりすぎたかな？

クロ

「やりすぎだ」

ようクロ

クロ

「もう訂正はしない」

なぜ？

クロ

「なかなか気に入ったからだ」

そうなんだ

君も苦勞するね

奇行録に飛び入り参加させてやるよ

クロ

「それはむしろ罰ゲームじゃ…」

気のせいだ

後、強制的な

クロ

「不幸だ…」

第四話 もう1人の魔法少女（前書き）

ついにフェイト登場です

なんかやつちまった感がえらいこつちや

今日はちょっと練習しなきゃばいんで
早めに更新しました

コーヒー飲みながら書いてたんですけど
インスタントより

喫茶店のほうがかなりおいしいですね

第四話 もう1人の魔法少女

ユーノ

「これは、魔法!？」

ちよっと、俺がフルボッコだド的なことになってるのに
興味そっちに行くわけ？

なのは

「レイジングハート、お願い!」

なのはさんもツスカ

クロ

「もういいや…」

ネコは俺が守るからお前はあいつを食い止めとけ」

なのは

「ありがとう、クロさん!」

まったく年上はつらいねえ

クロ

「シールド展開!」

ガンブレード

「イエスマスター」

(キュイン)

さてドンドン… (ドンドンドンドンドンドン) じゃあああ！

クロ

「いきなりはひどいと思わないか？」

ガンブレード

「シールドまで展開しといて何言ってるんですか」

手厳しいっすね

「！魔道士…」 (ドンドンドンドンドンドン)

クロ

「よし！今度こそ！」

(ガガ)

よし今回は…！

(バキ)

ダメだった…

(ズドン)

ギャース

「にゃ？」

不思議そうな顔してんじゃねえよドチキシヨウ

視点、なのは

「同系の魔道士…」

ロストロギアの探索者が…」

この子も魔道士なの？

もしかしてユーノクンと同じ世界から？

「バルディッシュ、インテリジエントデバイス」

なのは

「バル、ディッシュ？」

もしかしてあの子が持つてるあれの事かな？

「ロストロギア、ジュエルシード…」

(ギュイン)

！鎌？

「申し訳ないけど…」

「いただいでいきます」(ギュン)

こつちに来た！？

避けなきゃ！

(シュ)

危なかった…
寸前で飛んで避けた

「……………うん！」

鎌の刃が飛んできた!?

(ダウン)

ユーノ

「なのは！」

(ブワ)

危なかった
何とか防げ…

(ブン)

わ!?

(ガキン)

びっくりした…

なのは

「なんで…なんで急にこんな！」

「答えても…たぶん、意味はない…」

どういふこと？

なのは

「くっ！」

(ガキン)

(タン)

お互いに距離をとり、戦闘体勢に入る

この子はきつと私と同年ぐらい…

きれいな瞳、きれいな髪

だけど…この子…

クロ

「手えかそうか？」

なのは

「大丈夫！」

なんとかかなりそうかな？

クロ

「そうか」

「……………(バチチチ)…ゴメンね……………」

(ダウン)

え!?

なのは

「きゃ!」

ユーノ

「なのは!」

負け、ちゃった…

視点、クロ

なのはが吹っ飛んだ!

しかも頭から落ちて行ってるし!?

やばい!

ユーノ

「ふ!」

よかった…間一髪ユーノが魔法でクッション作ったから何とか大丈夫だ…

「はっ!」

え?(ダウン)

クロ

「アベシー！」

吹っ飛ばされた

「捕獲！」

(バチチチチ)

ネコに向かって雷が飛んでいく

「にやあああ！」

クロ

「巻き添えでやあああ！」

(スウ)

えっと、たしか、ジュエル…シート！
が出てきた

「ジュエルシート、シリアル14…封印」

惜しかった！

ん？なんか上から…

クロ

「アバババババババ！」

もう…無理…

(ガク)

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ん…ん？

クロ

「ここは…」

そういやちびっ子に吹っ飛ばされて、さらにアベシさせられたんだ
っけ？

ガンブレード

「やっと起きましたか」

クロ

「おお、ガンブレード」

ガンブレード

「ユーノさんは助けを呼びに行きましたよ？
なんで年下のあなたが伸びてるんですか」

あいつ俺より年下なの？

ぜんぜん知らなかった

クロ

「とりあえずこの姿だとまずいな
ネコ型になるか」

青狸にはなりませんよ？

ガンブレード

「まったくもうちょっとしっぴかりしたらどうですか？」

この後みっちり絞られた

きつかったツス

その後みんなが来て（その時にも念話でみっちり絞られた）なのはが運ばれていった

そのとき念話でユーノにこう言われた

ユーノ

「今夜特訓だね」

勘弁願いたいものだ

その後なのはが目を覚ました後
家に帰った

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ユーノ

「あれは間違いなく僕と同じ世界の住民だよ」

なのは

「ジュエルシード集めをしてるとまたあのことぶつかっちゃったのか
な…」

暗い…耐え切れない…
よって俺が元気付けてやるっ！

クロ

「大丈夫だつて！
俺がいるんだし！」

なのは・ユーノ

「クロさんはむしろ邪魔」

なんてこつたい…

まさかのカミングアウト

みんな気づいちゃいるけど言わないことをすっぱりといいやがった…

みんなは言わないよね！

……なんでみんな目をそらすの？

ちよつとひどくない？

そらしたやつら全員後で面かせや

え？怖くない？

お前弱いから？

それはみんな気づいちゃ (エンドレス)

クロ

「ちよいなのは

ロープない？」

なのは

「はい、でも何に使うの？」

クロ

「首吊る」

なのは

「絶対ダメえええ！」

いいじゃないか…

どうせお先真つ暗なんだし…

今行くよ天使達

なのは

「ユーノ君もてつだつてえ！」

ユーノ

「わかった！」

H A N A S E !

「なのは、うるさいぞ

もう少し静かに…！」

なのはのお父さん登場&硬直

「…なのは、ネコに首を吊らせるな」

なのは

「違うの！クロさんが勝手に！」

「首を吊るネコなんていないだろ？」

ネコ言うな
なれたけど…

なのは

「いるの！」

「貸してみなさい」

(グイ)

ああ！天使の輪が！
何のこれしき！

「ほら簡単にはがれた
首を吊るネコなんて…」

(ピヨーン)

(ぶらーん)

「……いた……」

なのは

「お父さん止めてー！」

(ギャアギャア)

「しるさいわよー！」

今度はお母さんか

そして家族全員来るまでこの騒ぎは続き
最終的にかごに詰め込まれた

その中でガンブレードに

ガンブレード

「あなたが死んだら困るんです」

死ねっというほうだと思ってたガンブレードにこんなことをいわれ
て感激していたら
止めが来た

ガンブレード

「暇つぶしの相手がなくなりますから」

そこですか…そこですか…

ここで一句

回り見て

なぜか俺だけ

四面楚歌

泣きたい…

第四話 もう1人の魔法少女（後書き）

今皆さんが思ってること当てましようか？

「うわぁ、爺みたいだ」

どうですか？当たってますか？

すいませんね、俳句とか時おり思いつくんですよ

ではここでも一句

被災地の

皆さん元気に

がんばって

僕ができるのは応援ぐらいなので取り合えず俳句を送ります

言うのは簡単なんですけど実際は難しいんですよ
とにかく！

がんばれ！被災地の皆さん！

がんばれ！俺！

カットビングだ！俺！

すいません調子に乗りすぎました

第五話 ゆっくりおせしてくれ…（前書き）

やっちゃいましたねえ

まあ、気にしませんけど

誤字脱字の報告があればできるだけ早く修正しますので報告お願いします

第五話 ゆっくりとさせてくれ…

今日は温泉に行くらしいんです！
今日はくつろぐぞー！

ガンブレード

「テンション高すぎです
キモイですね」

すっぱり言われた…

今日だけなのはに預けようかな？

ガンブレード

「もし私を引き剥がそうなんて考えているならやめたほうがいいですよ？」

70

なんか考えてること読まれた…
いつもはそんなことしないのに…

ガンブレード

「もし私を誰かに預けたりでもしたら人型になって平手打ちですよ？」

クロ

「その程度、痛くもかゆくもない！」

ガンブレード

「じゃ試してみますか？」

そんなことできるわけな（パン）へブン！

クロ

「今何した？」

ガンブレード

「平手打ちです」

それをどうやったか聞いてるんだけど…

ガンブレード

「着いたみたいですね」

よし！くつろぐ！

雫を聞きながら、

陸に揚げられたクラゲ級にダランとしてやる！

そしてこのところつけたダメージと疲れをとるんだ！

でもちよっと待てよ…

CORE PRIDEも捨てがたい…

え？しょうもないところで間を作るな？

でもみんな期待したでしょ？

ならいいじゃん！

ガンブレード

「顔が麻薬中毒者みたいな顔になってますよ」

俺、そんなにやばい顔だった？

これからは気をつけよう

そうだ！

クロ

「お前曲流せる？」

ガンブレード

「一応できますよ？」

クロ

「どんな曲がある？」

ガンブレード

「この星にある曲は全てロードしてあります」

さすがは我がデバイス
仕事に抜かりがない

ガンブレード

「さまざまな怪談話もロードしてあります」

クロ

「やめて、夜トイレに行けなくなるから」

本気でいけなくなるから

夜の風の音でトイレに行けなくなる俺だぜ？

え？びびりすぎ？

一回火の玉を見たことあるからそれからそういうのダメなんだよ
あれって科学的に出る理由が説明されてるらしい

でも最初に見たのが墓場、しかも夜だったのがアウトなんだ…

しかも小さいときに

だからかなり染み付いてるわけだ

ガンブレード

「マスターってかなりびびりですよね

ちゃんと 付いてるんですか？」

下ネタはいけませんよガンブレードさん

それに怖い物は怖い

しかも今怖がつてる原因はあなたです

え〜と

クロ

「部屋はどこ？」

ガンブレード

「マスターはアフオですね」

オブライトに包もうとしてオブライトを完全に破ってますよ

第一きたことない場所でこんな鬼畜な部屋番探すのに苦労するわ

ついでに今は人型耳と尻尾は帽子とズボンで隠してる

でも尻尾らめえ〜とかにはなっていない

なったら大問題だ

クロ

「1236…ここだな」

部屋数多くない？ロビーから一直線だけどロビーがかすむぐらいに歩いたよ？

しかも両側に部屋があるし

確か一番手前が1001だったような気がする

他にもこんな感じの長い廊下があるのかな…

クロ

「中広っ！」

こりゃ1人で使うには広すぎないかな？

それとも誰か使うのか？

ガンブレード

「マスター、早く準備をしてください

お風呂行きますよ」

クロ

「わかったわかった」

っていかしやべっていいのか？

一応2人だけけど…

第一お前が何で風呂を楽しみに……………

……………

クロ

「誰？」

ガンブレード

「それはポケですか？」

ああ、なんかみたことあるような…

いやない、絶対FSP2の 力を見たことあるわけがない

ガンブレード

「これならどうですか？」

白い水着に…あ

(詳しくはS y u r a一行の奇行録をみてね)

クロ

「なんか今果てしなくダメなものに介入された気がする…」

ガンブレード

「気のせいですよ」

でもほんとに綺麗だよな
オリジナルを超えている
え？オリジナルは何か？
ファ タシースター ー タブル2のミ っ て検索してみ
ファンタ ースターポ タブル2の カ っ て検索してみ
大事なことだしわかりやすいので二回言いました

さらにあれを美化したような見た目とかまさに絶世の美女って感じだ

ガンブレード

「準備はできましたね？
なら行きましょう」

クロ

「拒否権は…」

ガンブレード

「ないです」

ですよねえー

でもだからって襟の後ろもって引きずらないほしい
風呂どころじゃなくなるから

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ただいま風呂の中

いや〜風呂っていいね！

にしても…

クロ

「体すごいッスね」

「そうかい？昔色々あってね」

なのはのお父さんの体にたくさん傷のあとが…
色々って何があったんだ…

「君、なかなかいい体してるね」

クロ

「あ、そうですか？」

いつもなのはと訓練してるから…」

「訓練？」

なのはを知っているのかい？

なら、実力のほどを見せてもらいたいね」

やべえ、地雷踏んだ

こんなに危なそうな人とバトルとか絶対勝てないよ…

「なんならここでやるかい？」

それは危ないと思う

おもに財布が

クロ

「いいですけど物壊しちゃダメですよ？」

「もちろんだ」

そして試合フルボッコが始まった

Side、ガンブレード

「A a a a a a a a ……」

隣からマスターの物らしき悲鳴が聞こえますねえ

ユーノ

「キュ！キュー！！」（ジタバタジタバタジタバタ）

ユーノさんはたしか男性でしたよね？

なんでいるんでしょうか？

まあ、とりあえず私はそういうの気にしませんけど
でも…

ガンブレード

「寂しいですねえ」

私以外はなのはさんのお知り合いぐらいしかいませんから私だけ1
人なんですよねえ

ガンブレード

「さて、あがって準備でもしますか…」

拷問の、ね

第五話 ゆっくりさせてくれ…（後書き）

怖っ！？

さて、ガンブレード

ガンブレード

「どうしたんですか？ 糞作者」

これを受け取れ

ガンブレード

「……………ありがたく受け取ります」

さてさて次回が楽しみだ

クロ

「何か嫌な予感がする…」

第六話 俺ってなんか悪い事した？（前書き）

さてさて感想が来たり

他の作品に比べて人気が出てきてテンションあがってますよ！

そしてまたやらかしてしまった…

い、今何があった？
も、もう一度確認してみよう！

(ガラ)

間違いない…あれは…

クロ

「こたつ…」

そう！ネコの聖地こたつ！

風呂からあがった後でまだ少し暑いが…
そんな事どうでもいい！

クロ

「こたつ」 (ズボ) (カチ)

カチ？

(ババババババババババババ)

クロ

「アババババババババババババ！」

ガンブレード

「見事に引っかけてくれましたね」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

現在に至る

ガンブレード

「なかなか性能がいいようですね
またまりもに何か送ってもらいましょうか」

あいつが元凶かああああ！！

ガンブレード

「次はこれです」

血まみれトゲトゲバット

エスカリボ グゥ

某天使の撲殺兵器とか死ねる…

ガンブレード

「一瞬ですからね〜（ニコツ）」

笑顔が怖い笑顔が怖い笑顔が怖い笑顔が怖い
笑顔が怖い
笑顔が怖い

（ゴシヤ）

ガンブレード

「ふう、スッキリしました」

クロ

「殺すなあー！！」

ガンブレード

超気になる
でもだいたいはわかった
後で絶対ぶつ殺す！

まあ、それは置いて

クロ

「外に行こう」

ガンブレード

「なぜですか？」

クロ

「近くに綺麗な川があるらしいんだよ
そこで釣りでもしようかな？」

魚がいるらしい

しかも食べられる

ガンブレード

「わかりました

では……（カツ）…こんな感じでどうでしょうか？」

いきなり光って釣竿に変身とか何でもできる人みたいじゃないか
実際そうだけど…

ガンブレード

（カツ）「さあ、行きましょう！」

あ、笑顔

じつは魚が好きだったりして？
もしくはお腹がすいてるだけ？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

到着！

早速釣るぞー！

釣って釣って晩飯の代わりにするぞー！

ガンブレード

「マスター、がんばってください」

うおおおおおおおおお！！

（数時間後）

全く釣れない…

ガンブレード

「マスターは下手なんじゃないですか？」

それは言わないお約束

（カッ）

ガンブレード

「マスターは役立たずですね
私が見せませす！」

とか言いながら本人は食べただけだと思っ

で、釣りはじめようとしてるんだけど…

ガンブレード

「む、虫…」

意外な弱点発見

ガンブレードが人型になったため竿とえさを買って来たんだけど…
まさかの弱点

ガンブレード

「わ、私には無理です！」

意外な発言

そんなに虫が苦手なのか…

クロ

「俺がつけてやるのか？」

ガンブレード

「いや、いいです

やめにしましょう」

クロ

「なぜ？」

ガンブレード

「振るときに頭につくかもしれないじゃないですか！」

そこまで苦手とは…

これはいい情報入手でき（カァァ）目がああ！目があああああ！！

ガンブレード

「マスター、ジュエルシードです」

対応早いね…

えっとえさは…あり？

クロ

「えさが…ない…」

ガンブレード

「マスターが嫌みのために使う恐れがあるためさっきの光とともに川に投げ入れました」

そこまで苦手なんだ？

超意外、またガンブレードがああああ！みたいなかんそうが来るよ

「ビンゴ！」

なんぞ？

ガンブレード

「あの人はたしか先日魔法少女のようですね」

え？たしか…

俺をフルボッコにしてくれちゃった子だっけ？

クロ

「よし！この前の恨みい！」

ガンブレード

「マスター、大人気ないです」

うるさいやい！

俺だって鬱憤たまってたんだ！

クロ

「覚悟おおお！」

「敵？

アルフ」

「了解だよ

フェイト」

(バキ)

クロ

「バハマあ！」

負けた…

しかし名前は覚えてぞ！

魔法少女がフェイトで、俺を殴ったほうがアルフだな！

デスノート拾ったら名前書いてやるう！

あ……あれフルネームじゃなきゃダメじゃなかったっけ？
まあいいや

ん？なのはとユーノが来たな
やっちまえ二人とも！

(バチチチチチチチチ)

うわあ…

なんかすごい戦い…

ユーノってあんなに強いんだ…

何でなのはに助けてもらってるんだろ？

デバイスが補助するんだからユーノがライジンググハートを使ったら
絶対強いよね？

あの子も瞬殺じゃね？

まあとりあえず…

(ドパン)

俺は川でドンブラコしてるから2人とも、後は任せた

第六話 俺ってなんか悪い事した？（後書き）

クロ乙 W W W

クロ

「作者…」

え？なに？

クロ

「作者専用拷問セット…」

それ誰からもらったの？

クロ

「シエリアさんだ」

違う作品からもらうなあ！
そしてシエリアめええ！

シエリア

「まあいいじゃないですか」

なぜここにいるし

そしてそのいい笑顔やめい

シエリア

「いやです」

第七話 異空間の母（前書き）

プレシア登場！

さてさてどうやって壊していいのかな？

ところでチヨコのヨの部分で隠したら変態と呼ばれたんですが
何がいけなかったのか教えて？

第七話 異空間の母

ガンブレード

「マスター、おきてください
マスター」

クロ

「後5時間…」

ガンブレード

「日が暮れます」

的確なつつこみありがとうございます

どうやら川の流れるあまりにも気持ち良かったので寝てしまったよ
うだ

クロ

「ところでこじこじ…」

なんかいかにも時空の狭間ですみたいな所にいるんだけど…

ガンブレード

「どうやら違う空間に飛ばされたようですね」

マジで？

やばくね？

クロ

「弁当もってないんだけど…」

ガンブレード

「遠足じゃありませんよ？」

そなの？

よかった今持つてるおやつは完全に200円こえてるから

ついでに持つてるのはカントリーマム、メンゴス、ポテチップス、
うめえ棒30種それぞれ10本セット、e t r

ついでに全部ガンブレードが持つてる

「あのお…」

クロ

「どうした？」

ガンブレード

「私じゃありません」

じゃ誰？

「あのお…私です…」

クロ

「はっはっは、なんだ君か！

にしても君、体が透けててまるで幽霊みたいだね！

はっはっは！ふう…」

ガンブレード

「マスタアアアア！」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

クロ

「はっ！」

ガンブレード

「気がつきましたか」

クロ

「私はクロ！？ここは異空間！？」

ガンブレード

「かなりはつきりとした記憶ですね」

いや〜なんかお約束だからつい…

なんか違う気もするけど……

クロ

「そついや聞いてくれよ

実は夢の中に幽霊がでてさ」

「そつなんですか」

ナゼココニイル？

やべえ…はげしくデジャヴった…

クロ

「我がデバイスよ
後は任せ…た…」

ガンブレード

「気絶しないでください」

そんなこといっても！

クロ

「だって！だって幽霊がああああ！！」

「あの、話聞いてもらっていいですか？」

クロ

「言っておくが体は駄目だぞ！
俺の体は譲らん！！」

「え？あ、はい」

うむ！ならよろしい

クロ

「なんでも言いたまえ」

ガンブレード

「変わり身早いですね」

俺は悟ったんだ…

これはこの子？の話を聞かない限り抜け出すことが出来ない無限ループに入ったんだと

よって俺は切り抜ける！

「ではとりあえず説明を
実は……」

カクシカジカシカクイムーブ

で私のお母さんと妹を助けてほしいんです！」

なるほど他の車が売れてて全く家の車が売れないから助けてほしい
と

クロ

「そうか、大変だなあ」

ガンブレード

「マスターはバカですか？
理解できてないですよね？」

クロ

「うん」

さっきの文章からして車の話だと思っただけど、なんか違う感じが
してきた

え？地の文？

ナニソレ、オイシイノ？

ガンブレード

「ですから………の………が

………だから………それを………って事ですよ」「

真面目に聞かなきゃ殺されると野生の勘が叫んでいたのも真面目に聞いたところ

どうやらこの子の母親が自分が死んだためにあはは、うふふ、みたいな事になってるから一発殴って正気に戻してほしいと

クロ

「だいたいわかったかな？」

ガンブレード

「では答え合わせです」

なんか死亡フラグ…

ガンブレード

「私達は何をすればいいでしょう？」

クロ

「この子の母親を殴る」

ガンブレード

「マスターはバカなんですなもういいです」

この頃の子は短気でいけないもう少し柔らかく俺のように

ちよい、今「お前みたいになったらダメになる」とか言ったやつ後で顔面ひっかくぞ？

クロ

「要するにババア1人正気に戻せばいいんだろ？
だったら別に簡単じゃね？」

「ならお願いします

私は母を見守っていますから」

「ん、じゃな」

さて……

どうやって帰ろう？

気絶してた日数はたぶんかなり長いだろうし
もしかしたら俺達忘れられてるかもしれないな

クロ

「とりあえず帰る方法を考えよう」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

あゝダメだ

クロ

「帰り方がわからない」

ガンブレード

「マスター、あれを」

なんか家？らしき物発見さて中に入りますか

ナゼココニイル？

ガンブレード

「この前の魔法使いですね」

クロ

「なぜここに？」

あれ？フェイトだけが中に入ってく…」

使い魔はつき従うんじゃないかなかったっけ？
とりあえず行ってみよう

潜入成功

アルフにも気づかれなかったし
中に入る時も全く気づかれなかった
まったく、俺の才能が怖いぜ

(ビシイ)

え？なに？なにがあったの？

俺が自分の才能に酔っていると何があったのかオバハンがフェイト
を鞭でたたきはじめた

クロ

「やりすぎじゃね？」

ガンブレード

「たしかにそうですね

止めますか？」

クロ

「これを止めなきゃ人じゃねえんじゃね？」

虐待はいけないと思うんだ

クロ

「ガンブレード、バトルモード」

ガンブレード

「了解しました」

(キュピーン)

「な、なに!?!」

じゃん!

漆黒の仮面に漆黒のマント

さらに例の姿のガンブレード

俺かつけええ!

とりあえず俺だとバレルとやっかいなので
喋り方とか変えて話すことにしましょうか

クロ

「そなたの娘から言伝を預かって参った」

「私の娘？」

フェイト、あなたはかあさんを悲しませたいの?」

フェイト

「私じゃな!いいわけはいらないわ!」「うっ!」

また鞭でぶってる

しかたない…

成敗するでゴザル

クロ

「サークルデストラクション!」

自分の周りに円を描くように爆弾を配置し爆破

「そのていど！」

たまがしかしこな派手な技は目を引くための囮
本命は…

クロ

「はっ！」

「なっ！？」

俺のスピードをいかして相手の後ろに回り込み武器を弾き飛ばす事
みごとに決まり相手が持っていた鞭は遠くに飛んでいった

クロ

「チエツクメイト」

「くっ！」

クロ

「なぜこんな事をする？」

「誰が言つと思つ！」

駄菓子菓子

我がデバイス、ガンブレードの性能は想像を絶する

クロ

「答える」（カチャ）

相手を問い詰めるふりをして相手の首もとにガンブレードを当てる

「私は喋らない」

答えてもらわなくても大丈夫

ガンブレードは対象の頭部に触れれば相手の脳細胞に干渉し、情報を得ることができる

だから時々思考を読まれるんだ！

ガンブレード

「どつやらどつやらさっきの子を生き返らせようとしているみたいですよ」

OKOKなら問おう

クロ

「蘇生は可能か？」

ガンブレード

「1週間ほどかかりますがなんとか本人の意志の強さにもよりますがね」

なるほろなるほろ

じゃあ簡単だ

とりあえず交渉だな

クロ

「なるほどな

理由は理解した」

「なに!？」

クロ

「娘の所に連れて行け
時間がかかるかもしれないが蘇生する事ができる」

「!？それは本当か!？」

クロ

「ああ、だが、必ずしも成功するとは限らない」

「……わかった、娘の所に連れて行こう」

よかったよかった

クロ

「そこのお前

その子を連れて行け

そして少しずつでいい

例のものを集めておけ」

アルフ

「例のもの?」

ほら、あの、あれだよ

クロ

「そなたらが今まで集めていたものだ

必要になるかもしれん」

アルフ

「……わかったわよ……」

OKOK物わかりがいい子は大好きです

ちて、二の子が…

「アリシア……」

らしい

さて

クロ

「ガンブレード」

ガンブレード

「了解です

マスター」

名前呼んだだけでなに言いたいかわかるってすごくない？

クロ

「じゃ、外行くか」

「な！？直してはくれないのか！」

クロ

「いや違う

俺がいると気が散るかもしれないし
俺にできることは何もない」

もう、完全にガンブレードに頼ってるからね

どのくらいかって言うと青狸がいる家のあやとり名人ぐらい

「ならば私も外に出よう」

わかってくれてよかったよ

なんか危ない人にしか見えないから

クロ

「ところで名前は？」

「プレシアよ

プレシア・テストロッサ」

クロ

「何でそこまであの子にこだわるんだ？」

プレシア

「あの子は…」

あの子は私の実験のせいで死んでしまったの…」

うわっ…暗い…

プレシア

「私は仕事で忙しくてなかなかあの子と遊んであげられなかった
だから早く実験を終わらせて長い休暇をもらってあの子とすごす気
だった」

クロ

「で、その実験が失敗したと」

プレシア

(コクッ)

「それから私はそのときの実験を利用してフェイトを作った
でもフェイトはあの子にはなれなかった
性格も、笑顔も、何もかも…」

なるほどな

クロ

「だからあの子を生き返らせる方法を模索し
ジュゴンシードッグをフェイトに集めさせたのか」

プレシア

「ジュゴンシードッグじゃなくてジュエルシードよ
まあそういうことね」

フェイトはあの子になれなかった
だからあの子を道具として使うことにしたの」

道具って…

クロ

「でもフェイトはあんたの期待にこたえようとした
あんたを、母親を喜ばせたいから」

プレシア

「それが何？」

あの子は道具、それ以下でも、それ以上でもない」

「ごうじょうだねえ」

クロ

「本当にそうなのか？」

自分でそう思い込んでるだけじゃないのか？」

プレシア

「しつこいわね」

クロ

「だってそうだろ？」

怒ってるのだってあいつに期待してたからじゃないのか？」

プレシア

「まあ…そうかもしれないけど…」

よし、もう一押し

クロ

「けどなんだ？」

あいつはあなたのためにがんばった

あいつは母親のあなたに喜んでほしいからこそがんばったんだ
その気持ちは否定しちゃいけないと思うぜ？」

プレシア

「でも私はあの子の親じゃない…」

あの子の生みの親じゃないのよ…」

は？なにそれ？

クロ

「関係あんのか？」

プレシア

「え？」

クロ

「生みの親じゃなきゃ親じゃないのか？」

あなたはあの子をあそこまで育てたんだ

胸を張って育ての親っていえるじゃねえか」

言ってることに間違いがあれば訂正をお願いします

プレシア

「そうよね…」

私はあの子を育てたのよね…

ありがとう、あなたのおかげでやっと気づけたわ」

クロ

「まあ、昔から世話焼きだっって言われてたからね
お礼を言われるようなことはしてないよ」

プレシア

「でも私はあなたがいなきゃ気づけなかった
ありがとう」

ハズっ！

なんかめっちゃハズい！

まあとりあえず一件落着？

でもこの時俺はこの後起こることを知らなかった

プレシア

「うっ！」

クロ

「どうした！？」

いきなり血を吐いた！

適当に終わらせようと思ったたらなんか血を吐いた！

プレシア

「アリシアが死んでから体がよくないの…」

クロ

「ちゃんと食べ物食べてるのか！？」

プレシア

「栄養は補給してるわよ

一日二回栄養を注射で補給してるわよ？」

絶対それが原因だ

絶対、栄養失調だ

クロ

「ちゃんと寝てるのか？」

プレシア

「ちゃんと寝てるわよ？」

一日1時間は寝てるし
多い日なら4時間ぐらい寝てるわ」

100%それらが原因じゃねえか…

クロ

「今度からは余裕もできたんだし

一日三食、一日7時間は寝る

これをしてないとアリシアが生き返っても一緒にすごせないぞ？」

それでもいいのかな？

プレシア

「それは困るわね

ちゃんと注射の回数を増やしましょう」

クロ

「ちゃんと口から食事しろ」

第七話 異空間の母（後書き）

さてさてこの展開は予想できましたか？

クロ

「よそつでできるはずがねえ」

ですよねえ

はい、せつかくなのでキャラの詳細を発表します！

クロ

「いきなりだな」

いや〜皆さんの頭の中の
幻想をぶち壊す！！
って感じで面白くない？

クロ

「それだから読者が減るんだよ」

（ ． ． ． ）

とりあえずクロのプロフィールをどうぞ

名前

弱野 強志

年齢

15

身長

164

体重

56

見た目

色白の肌で髪や目、服装はこれでもかというほど黒い
顔には幼さが残りまさにイケメン

好きな物・人

ネコ、コタツ、優しい人

嫌いな物・人

怖い人、女子、犬

特徴

これでもかというほどネコに近い性格&オーラ
そのためもとの世界では女子にちやほやされていた
そのためいじめの標的にされていたのもある

クロ

「マジか…」

というわけでまったく読んでない人！
後で後悔するぞ！

クロ

「そういう人は読んでないと思う」

そついやそつだ

さてさてまた自壊…じゃなかったまた次回！

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その1（前書き）

あまりにも遅くなりそうなので途中で投稿です

クロ

「反省しろ」

書き終わってすぐにデータがパーンして一万文字消えたからブルーな気持ちになった

クロ

「今回は？」

7000文字だよ？

クロ

「多目だな」

いつもよりはるかに多いよ！
ではどうぞー！（・）（・）

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その1

ああ、暇だ
暇で暇すぎて
仕方がない

クロ

「クロ、心の俳句」

ガンブレード

「どこのおじいさんですか」

やはりガンブレードにはネタがわかったようだ
さすがだな

さて暇だ…
どうしよう？

クロ

「空から人が降ってきたりしないかなあ」

ガンブレード

「そんな事があつたら大問題です」

ですよねえ！
ついでに今はジュエルシールドがどうたらこうたらが終わって暇して
る所です

クロ

「まあ色々あったけど楽しかったな」

ガンブレード

「そうですね」

そういやこの公園でガンブレードに頭捕まれたなあ
痛かった…

クロ

「一度でいいから人が空から無装備ダイブしてるとこ見てみたいなあ」

ガンブレード

「だからそんな事「Aaaaaa!!」ありましたね…」

視点、時雨

黒い穴を無視して通り過ぎようとしたら吸い込まれた
その後空から落下してるんだが
そこまではいい
問題は…

時雨

「魔法が使えねえええ!!」

なんでこうなった？

たしかフェイトと買い物に行ってたはずなんだが…

あれ？なんか落ち着いてね？
死ぬときって落ち着いてるものなんだね

俺が死を覚悟したとき声が聞こえた

「ガンブレード！」

「了解です。マスター」

そちらを見るとコスプレしている男と、なかなか美人な女性がいた
それを見た後意識を失った

視点、クロ

なんか人が落下しているため助けることにした

クロ

「ガンブレード！」

ガンブレード

「了解です。マスター」

やっぱスゴいね

うちのガンブレード

名前呼んだだけでマットになったよ
衝撃を吸収する力がえげつないタイプのやつ

(ボフン)

ナイスキャッチ

あれ？気絶してる

よし、家に連れて行こう

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

やっぱりすごいね！

連れてくるときにバレるとやっかいだからネコにできない？って聞いてみたら普通にできたよ！

どんだけチートなんだよ家のデバイスは…

クロ

「なかなか目を覚まさないな」

ガンブレード

「そつですね」

連れてきて30分ぐらいたつたかな？

でも目を覚まさないんだよねえ

クロ

「ガンブレードなにかやった？」

ガンブレード

「やってませんよ？」

キャッチしたときにグキッて音がしましたけど」

それが原因だ！

「ん…ここは？」

あ、おきた

視点、時雨

時雨

「ん…ここは？」

目が覚めるとネコの小屋のような所にいた

クロ

「あ、起きた」

ん？今ネコが喋ったようないや、気のせいだな…

クロ

「君大丈夫？」

気のせいでは無かったようだ

時雨

「夢か…おやすみ」

クロ

「夢じゃない夢じゃない！」

リアルだから！
まじごうことなきリアルだから！」

ネコが日本語ペラッペラな時点でリアルではないと思う

時雨

「ネコが喋るわけない
よって夢だ」

クロ

「そのセリフ自分の姿見てからにしてくんない？」（スッ）

すげえな

この頃のネコは鏡を持ってるのか

……

……

時雨

「これなあに？」

クロ

「鏡」

まっとうな答えをありがとう

そしてなぜネコが鏡にうつってるんだ？

クロ

「まじごうことなきアメシヨだね」

時雨

「だまれ毛玉」

クロ

「酷くない？」

ガンブレード

「間違つてはいないと思います」

クロ

「マジか…」

ん？今声が…

時雨

「まさかその首輪デバイスか？」

クロ

「あたり

君をその姿にしたのもこいつ」

マジか…

ん？こいつ？

時雨

「お前がやったんじゃないのか？」

クロ

「俺にそんな技術はない」

頭が可哀想な人なのか

ク口

「さらに酷くない？」

時雨

「地な文読むな」

デバイスがありってことはおそらくなのはの世界だろう
なら一応いつ頃なのか聞いておくべきだな
だがこんな奴は原作にはいなかったし

とりあえず原作知識無いと問題になるから遠まわしに聞いてみるか…

時雨

「いくつか質問していいか？」

ク口

「OKス」

時雨

「プレシアは知っているか？」

ク口

「知ってるよ」

時雨

「なら八神は？」

ク口

「誰それ？」

時雨

「プレシアは元気か？」

クロ

「たぶん元気じゃね？
牢屋に入ってるけど」

時雨

「そうか」

おそらく無印とA・Sの間ぐらいだろう
ヤベエ俺超頭回ってる

時雨

「俺の頭のよさに全自分が泣いた」

クロ

「いきなりの不審な発言に全俺が引いた」
うっかり声にでてたぜ
まあいつか！

視点、クロ

こいつ頭大丈夫か？
不審な発言がおおいんだけど…

クロ

「ところで名前は？」

時雨

「俺は時雨だ
お前は？」

クロ

「クロ
本名は忘れた」

時雨

「忘れんなよ……」

てへ

でも仕方ないと思うんだ
常に否定され続けると本能が諦めたんだ

クロ

「とりあえず
ここにいっても面白くないので海行こう」

時雨

「いつもこうなのか？」

ガンブレード

「だいたいそうですね」

時雨

「苦勞するな……」

そこ、聞こえてるぞ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

海到着！

ついでに転移魔法使ったから一瞬です

誰が使ったかはみなさんご存じの通りです

ところで…

クロ

「なにこれ？」

時雨

「結界だな」

なんでここにあるのかな？

ガンブレード

「マスター、ロストロギアの反応があります」

クロ

「マジで？」

ならば速攻で！

クロ

「我関せず」

時雨

「帰るな」

頭ガツされた
痛い痛い

頭蓋骨凹む

アイアンクロウやめてえ〜

ガンブレード

「なにか来ますね」

ちよ、こっちはそれどころじゃないんですけど
頭の形状がかかってるんですけど！

(ビュッ)

クロ

「アバババババ！」

痺れびれ〜！

時雨

「よけるよ」

ガンブレード

「やっぱり弱いですね」

父さん、やっとわかったよ

これが四面楚歌っていうんだね
いつも言ってたよね

家では四面楚歌だって

あれ？父さんなんていたっけ？

(ビュッ)

第2弾！

今度は時雨狙い

時雨

(スッ)「いったい誰が(ドガア)やってるんだ？」

軽く避けた…

俺っていったい…

(ビュッ)

クロ

「アバババババ！」

またツスか…

(ビュビュビュビュ)

時雨

「あれか？」(ガガガガ)

すげえ…

全部防いだ…

デバイス使わずに

なんてチート？

俺なんてデバイス使っても防げないよ…

「あれ？君強いね！」

ん？

……

……

フェイト？

でもなんか…

クロ

「色違い？」

ガンブレード

「ポケンじゃないんですから」

でも白&赤がベースだぜ？

いつもは黒&黄なのに

これを色違いとせずなんとする

クロ

「捕まえて交換に出したらルギ ぐらいならでるかな？」

ガンブレード

「だからポケモ じゃないです」

まあまあかたいこと言うなよ

でも雰囲気が違うよな？

時雨

「お前は誰だ？」

「あたし？あたしはフルビー！」

時雨

「目的は？」

ルビー

「強い人の力があるから何人が殺さなきゃいけないんだってだから君達も殺すの」

かわいい見た目&言葉使いだけど超物騒なこといつてるよ

ルビー

「だから死んでね？」

これはあれだな

クロ

「正当防衛でいいのかな？」

ガンブレード

「いいと思います」

なら、やっちまうぜ

クロ

「バトルモード！

か〜ら〜の〜」

時雨

「ボロボロで何を言う」

あ、ホントだ

服がビツリビリだ

ところで…

(カアア／／／)

敵さんの顔が赤いのと、極太レーザーがこっちに飛んできてるのは
気のせいだと思った(ズドオオオオオ!) ギャース

リアルには目を背けちゃいけないね

時雨

セリエントリーギス
「光の精霊千一柱」
コエウンテース
サギテント・イニミクム
集い来たりて敵を討て!!」

何これ? 呪文か何か?

時雨

サギタ・マギカ
「魔法の射手連弾、光の1001矢!!」

ルビー

「にゃ!?!」

すげえ量の光の矢
でも…

クロ

クロ

「やっぱり縛っとくべきかな？」

ガンブレード

「動きを封じる上ではいいかもしれませんがね」

時雨

「俺は休む

ラテン語ムズイ」

ですよねえ

クロ

「じゃガンブレードは魔法が使えないようにしといて俺が縛っとくから」

ガンブレード

「変なことしないでくださいよ？」

クロ

「しないしない」

〜数分後〜

完璧

時雨

「やりすぎじゃね？」

ガンブレード

「マスターは変態ですね」

なぜに？

後ろで手首を縛って

足首縛って

二の腕と胴体を縛って

ひざあたりを縛って

足首と手首を結んだだけだよ？

クロ

「やりすぎたかな？」

ガンブレード

「加減ぐらいは覚えてください」

だっていつも負けてるから加減なんて忘れた
こっちだって必死なんだよ！

クロ

「ついでに色はあ^{ガス}kヒデブ！」

ガンブレード

「変なことはしないでって約束しましたよね？」

ガ、ガンブレードさん？

顔が怖いですよ？

ガンブレード

「時雨さん、少し待っててくださいね」

時雨

「は、はい!」

Help me!

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、時雨

遅いな…

クロがガンブレードに連れ去られて十分程度たったけど2人はいつ
ここに帰ってこない
何かあったんだらうか?

時雨

「もう少し待つか…」

「あ、ルビーちゃん…」

時雨

「ん?」

なのは?
いや色が違うし気弱そうだな
なんかもじもじしてるし

ついでに色は青と黒だ

ルビー

「あれ？サイファちゃん？

あれ？なんでわたし縛られてるの？」

名前判明

簡単に教えていいのかな？

サイファ

「ル、ルビーちゃんの敵、とらせてもらいます！」

死んでない死んでない

まだ生きてるから

サイファ

「サファイアバスター！」

青いレーザーか…

時雨

ハリエース・マーキシム

「障壁最大」

何重もの壁を作り攻撃を防御する

(ゴガア)

弱いな

壁を出しすぎたか

時雨

「今度はこっちの番だ」

軽くないですか…

時雨

エオカーティオ・ウォルキュリアールム

「風精召喚

コントゥベルナリア・グラディアアリア

剣を執る戦友

コントラー・ブーゲネント

迎え撃て！」

自分の複製を作り戦わせる

サイファ

「！くうう…！」

その間に

時雨

ウエニアント・スズリヤモス・フリグリエンテース

「来れ雷精風の精

クム・フルグラティオサキット・テンベスターズ・アウストリーナ

雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス

雷の暴風！」

雷と風で攻撃する

相手は俺のコピーに気を取られているので普通に当たる

サイファ

「！、キヤアアア！」

時雨

「弱かったな…！」

とりあえず縛っとくか

・…*…°。、
、°…*…°。、
・…

ガンブレード

「ふふふ」

ただいま鞭を持ったガンブレードにじりじりと迫られてるクロです
やばいね

ほぼ死亡フラグだ

俺死なないけど…

ガンブレード

「ふふふ覚悟してくださいね？」

いまさら何の覚悟がいるんですか？

ガンブレード

「ふふふ」

鞭の射程内に入った

オワタ

(ドガア)

なんぞ？

もしや救世主！？

「お前ら魔力たけえな

死んでもらうぞ」

違った、さらなるフラグだった
ついでにいい笑顔の知らない子だ
でも多分色違い？

ショートの髪を髪留めで止めてる女の子ただし色は黄色と緑がベース

ガンブレード

「さっきのルビーという子の仲間でしょうか？」

「！？まさかルビーを！？

ルビーの敵！」

激しく勘違いされた！？

クロ

「ガンブレード、頼んだ」

ガンブレード

「いやです

マスターが行ってください」

なぜ！？

いつもはこういふことは聞いてくれるのに！

ガンブレード

（たまにはもだえてるマスターを外から見るのもいいかもしれませ
んね）

サドだった

クロ

「なぜだ！？なぜなんだ！？」

こんちくしょう
金竹小くさ！！！！」

「はあ！！」

ぐべふ…

速攻でやられた

駄菓子菓子！！

(バシヤ)

水面を蹴って飛び上がり

「！？」

クロ

「アッパー！！」

昇 拳！！

「ああっ！！」

(バシヤ)

決まった！！

ガンブレード

「つまらないですね」

そこ黙ら

こっちは負けてやるほど余裕はねえんだよ！

ガンブレード

「それに不意打ちはひどくないですか？
相手は女の子なんですよ？」

よそ見するのが悪い

そして敵に容赦はいらぬ

クロ

「よし早速、レッツギッチギチ」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

やっと戻ってこれた

時雨

「遅かったな

ん？そいつは？」

クロ

「襲いかかってきたからギッチギチにした」

お約束だよね？

ルビー

「あ！シャングだ！」

名前判明、シャングというらしい

クロ

「その子は？」

なんか新しいのが増えてるけど

時雨

「襲ってきたので以下省略」

あんまり略してない気がする

時雨

「とりあえず、戻って話を聞くか」

シャング

「絶対教えないからな！」

サイファ

「そ、そうです！」

ルビィ

「だね！」

クロ

「帰りに翠屋でシュークリームでも買っていくか」

ルビー、サイファ、シャング

「」「」よるこんで喋らせてもらいます！」「」「」

素直でよろしい

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

途中シュークリームを9個ほど買って帰った

クロ

「じゃあ話の重要性であげる個数を増やしてやろう
まずルビーから」

期待はしてないけどな

ルビー

「何を話せばいいの？」

そこからですか…

時雨

「お前等に関する情報だ」

ルビー

「じゃあね、あたしたちは元々は一つで合計7人なの！
なるほどなるほど」

クロ

「まあやくにたったな」

時雨

「おそらくロストロギアだな」

クロ

「2個だな

後で渡す

次サイファ」

サイファ

「え、えっと

私達はこの世界の人の姿を借りていて

名前は私たち以外には、パール、エメラ、オキス、オウパです」

爆弾発言投下

ということ是要するに知り合いかもしれないのか

シャング以外はこいつらがそうだし

クロ

「3個だな、次」

シャング

「あたしらの力関係はルビー<サイファ<あたしくパール<エメラ
<オキス<オウパの順番で強くて

あたしらより他の四人の方が断然強いんだ

あと、オキスとオウパの魔法は即死レベルだから避けなきゃ死ぬよ
？」

怖っ!?

最後の2人怖っ!?

なにそれ!?

クロ

「余ってるのが4個なので4個」

シャング

「やったあ!」

仲間を売った事を自覚しろ

にしても花より団子ってほんとだな
すぐ引つかかった

クロ

「これが時雨、これがガンブレード、残り俺」

裏切った3人

「「「え!?!あたし達は!?!」」」

クロ

「別にお前等にやるとは言ってない

役に立つ情報ならそれに見合った個数渡すと言っただけだ
ついでにルビーはガンブレード、シャングは時雨、サイファは俺だ」

裏切った3人

「「「嘘つき!」」」

クロ

「裏切り者に言われる筋合いはない」

俺正論

え？卑怯？

俺が買った物なんだからいいじゃん

時雨

「とりあえず明日あたりもつ一度見に行くか」

ガンブレード

「ほうれふね」

ガンブレード、口に物を入れながら喋るな
よくわかんないから

クロ

「ほりあえぶひょうはへふは」

時雨

「それはどこ語だ？」

食べながら語

苦情は受け付けません

まあその後は例の3人をシュークリームを使っても遊んだ
食べ物で遊んだんじゃないやなくて、食べ物を動かしたら遊べた
猫みたいに釘付けだったからつい…

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

翌日

クロ

「レッツゴー！」

時雨

「ハイテンションだな」

おらつええ奴と戦いてえんだ！
理由はいくつか試しうちしたいから
だって威力パネエからあんまり撃ってないやつとかあるんだもん！

ガンブレード

「マスター、まさかあれを？」

クロ

「そつだ！

今こそ暴れるときぞ！」

ガンブレード

「わくわくしますね」

お前もかブルータス

ルビー

「でも勝てないと思うよ！」

シャンゲ

「あたし達とは段ちだからね！」

サイファ

「殺されちゃいますよっ。」

クロ

「ほざいてる！」

時雨

「闇熱血少年WWW」

クロ

「殺っちまうんだぜ」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「お前ら…誰だ？」

白いクロノ登場！

ルビー

「パールだ！」

パール

「ルビーか…敵に名前を教えるな…」

ルビー

「もう、バレてるよ？」

パール

「なぜだ？」

ルビー

「だまされたの！
殺しちゃって！」

パール

「言われずとも…」

なんか死亡フラグ…

時雨

「メンドクサイよって任せる」

ちよ、え？

クロ

「いいの？」

時雨

「いいんじゃない？」

クロ

「OKOK

レッツとか血みどろ！

ガンブレード、アサシンモード！」

ガンブレード

「了解ですマスター」

てってれ〜

クロ

「行くでござる！」

ニンニン
「

ジャパニーズ忍者！

クロ

「はっ！」

(シュツ)

ぞくに言うクナイを投げる
余談だが漢字で書くと苦無

パール

「その程度……」(スカ)

外したがモーマnty!

クロ

「必殺の！」

パール

「……」(スツ)

警戒してこっちを向いて構える

クロ

「あ！後ろ！」

パール

「そんな手に騙されると(ドス)な!？」

ク口

「だから後ろっていったのに」

パール

「この程度で動きが鈍るとでも？」

ク口

「普通なら即死だよ？」

パール

(ガク)「!？」

ク口

「クナイは漢字で書くとき苦しみが無いと書く

即効性の猛毒毒を塗って殺したり

当たり所によっては致命傷を与えて苦しむまもなく相手は死ぬことからきている」

パール

「毒か…卑怯な…」

卑怯とは何ですか！卑怯とは！

元々人を殺すために使う物なんですよ！

ク口

「魔法無効つきの神経毒にしてやったんだからあるがたく思え
本当なら即死だ」

もちろんギツチギチにするためだけだね

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

時雨が偵察に行った
して…

シヤング

「これほどいて」

クロ

「ダメ」

フオナ

「これキツい」

クロ

「我慢しなさい」

さっきからずっとこの調子
誰かヘルプ

「解いてやらんか!」

クロ

「だからダメだっ…:…:て?」

誰?

(ドウ)

クロ

「ゴウパ！」

は、腹に穴が…

クロ

「ゴプ！お前はゴパ！一体ブハツ！誰だペア！」（ダバダバ）

「よく死なないな」

死ねないんです

フオナ

「あれ？エメラ、何でここにいるの？」

エメラ

「魔力をたどつたらここにきた
おまえ等は捕まったのか？」

パール

「こいつは卑怯な手を使うから気をつける」

失敬な

本当なら口も塞いでたんだぞ？

まさに出血大サービス！

クロ

「ガンブレード、ガードモードペア」

ガンブレード

「死なない程度にがんばってくださいね」

大丈夫大丈夫！

腹は閉じたがら！

後は内臓だけなんで大丈夫「ゴパア」

エメラ

「面白い奴だな

我の家来にならぬか？」

クロ

「それならガンブレードの下僕のほうがまし」

エメラ

「そうか…

ならば死ね」

イヤだよまこつちゃん！

(ガギイイ)

エメラ

「ほう、今のを止めるか」

あつぶねえ！

今のは止めなきや肉片の確定だったな

クロ

「攻撃は最大の防御

なら防御は最大の攻撃だ

リフレクトインパクト！」

(ズガァン！)

今受けた衝撃をそのまま跳ね返す

エメラ

「ふむ、なかなか」

まったく堪えてないね
マジ強い

エメラ

「これならどうだ？」

(ザザザザザザザザザザザザザザザ)

えー(。(；)

なにこれ？

剣がいつぱいですよ？

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ
しゃれにゃないよ？

エメラ

「食らえ」

クロ

「嫌だ！」

(ビュビュビュビュビュビュビュビュビュビュ)

クロ

「アレテミス、アルテミス、アルテミス！」

アイテムは基本的に一種類につき1つしか出せないけど
アルテミスの盾ってゲームによって形状も能力も違うから幾つか出
すことができる

見た目は違うけど、どれもゲーム中最強の盾だから安心だ

(ガガガガガガガガガガガ)

エメラ

「なかなかやるな」

クロ

「M A D A M A D A！」

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その1（後書き）

おらはやっちまっただ〜
おらはやっちまっただ〜
次回を待て！

クロ

「もうちょいマジメに書け」

キャラ名考えるのに30分かかった

クロ

「俺たちは？」

5秒

ガンブレード

「お仕置きですね」

A a a a a a a a a a a a a a a a ! !

また遅くなると思いますが、遅すぎると感じた場合は途中で投稿
します

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その2（前書き）

今回でコラボは終わりです
なんかやっちまった感が…

とりあえずどぞ

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その2

（ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ）

ただいま海の上で交戦中
相手テラ強ス

エメラ

「どうした？その程度か？」

クロ

「防御特化にしすぎたため攻撃手段がないという罠」

何でこんなことにしたんだろ？

クロ

「時雨ヘルプ！」

時雨

「めんどい、ダルイ、ガンバ」

クロ

「薄情者！（ドドドドド）ギョワァッス！」

剣が！剣があああ！！

時雨

「フアイトWW」

クロ
「手伝えや！」

時雨

「仕方ないな

ザグルゼム、ザグルゼム、ザグルゼム、ザグルゼム、ザグルゼム」

いっぱい光？の玉が出てきた

(ジュジュジュジュジュ)

こっち来た

エメラ

「！（避けきれない！）シールド！」

すぐに反応してたてを出しているがまるでそこにないかのよつに貫
通した

あと俺にも当たった

時雨

「ザケルガ、ザケルガ、ザケルガ、ザケルガ」

当たる当たる当たる！

クロ・エメラ

「ぐあああああー！！」「」

痺れるー！

時雨

「満足か？」

クロ

「俺にも当たってたよな？」

時雨

「狙ったからな」

このやるう

でも敵は弱ってるみたいだから

クロ

「ガンブレード、マジックモード」

ガンブレード

「了解、マスター」

てってれ〜

ブラマジみたいな格好になった

クロ

ブラックマジック
「黒・魔・導」

巨大な黒い魔力の弾を打ち出す
ついでに威力はドルオーラい5つ分ぐらい

エメラ

「ぐ、あああああ!」

K・O!

クロ

「お約束のギツチギチタイム」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - -

完了

シャング

「2人も倒しちゃうなんてすごいわね」

サイファ

「で、でも後2人いるよ」

フォナ

「そうそう！大丈夫大丈夫！」

クロ

「黒幕みたいな話してるところ申し訳ないけどいったん帰るよ」

今日は疲れた…

なんだかんだで時間かかったから今夕方なんだよね
しかも殆ど食べてない

クロ

「いったん帰るぞ！」

ガンブレード

「転移開始」

ガンブレードの転移は普通とは少し違う
座標を知らなくてもイメージから座標を導き、そのまま転移する方
法をとる

だから少し時間はかかるけど确实だ
ガンブレードいわく違うところをイメージしない限り失敗すること
はないらしい

(シュツ)

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

到着！

あれ？

クロ

「……」

さっきとは違う海の上
だって岸が見えないんだもん

ガンブレード

「おかしいですね

ちゃんとできてたはずですけど……」

「……」

「歓迎するぜ？」

俺とガンブレード!?
ん?今激しく違和感が…

「俺はオキス!」

「私はオウパ

あなた方の魔力は非常に多い
よってあなた方の魔力…貰い受けます」

やっぱり聞き間違いじゃないね

俺が敬語だああああ!!

そしてガンブレードが俺っ子だああああ!!

ガンブレード

「私の姿で下品な言葉を発しないでください
虫唾が走ります」

クロ

「同感」

俺が敬語とか八下しか喜ばない

ついでに八下は元の世界のクラスメイトでホモだ

ガンブレード

「この方は私がやっても?」

クロ

「どっこい」

ガンブレードはオキスをこそ望らしい
おお怖

ガンブレード

「……転移開始」

今なんと？

(シユ)

消えた！？

俺をおいて消えた！？

オキスも消えたけど……

オウパ

「では私達も始めますか」

ちょ、それ死亡フラグ

100%回避不可能なフラグじゃん

オウパ

「やりますか」

脱兎のごとく！

ク口

「逃げる！」

オウパ

「逃がしませんよ！」

そして命がけの鬼ごっこが開始された

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、ガンブレード

なかなか強いですね

オキス

「やるな」

ガンブレード

「あなたこそ」

(ドドドドドドドドドド)

しばらくかかりそうですね

マスターは大丈夫でしょうか？

私がないので逃げるぐらいしかできないと思っんですけど...

とりあえず今はこの方を倒さなくては

オキス

「はははははは！」

ガンブレード

「くっ！」

(ガガガガガガガガ)

すぐにはいけそうにありませんね

ガンブレード

「サンダー…」

魔力を手元の鎌の先にためて

ガンブレード

「ブレイカー！」

雷の斬撃を打ち出す

斬撃といっても横の長さで3m

まず避けることはできないはずで

オキス

「な!？」

はあああ…

剛破掌！」

(ブワア!)

消されてしまいましたね…

今のほぼ全力だったのですが…

不意を撃つしかなさそうですね

オキス

「メテオ・インパクト！」

右ストレート?

いや…

(ドウウ！)

巨大なレーザー砲ですか…

ガンブレード

「ギガプレート！」

目の前に鋼鉄の板を作り出し時間を稼ぐ

ガンブレード

「俊足！」

その間に移動してできるだけ相手に近づく

あのパワーはかなり危ないですが

不意を撃ち倒すなら多少の負傷は免れないでしょうからね

オキス

「ん？塵になつたか？」

相手の背後に回りこむことには成功しましたね

ガンブレード

「燃え盛る炎の神剣《グラディウス・ディウィヌス・フランマエ・アルデン》！」

巨大な炎の剣を作り出し振る

オキス

「後ろ!？」

(ドガア!)

やれましたかね？

でもこういうことを考えてるときって基本的に…

オキス

「ぐ、うう…」

生きてるんですよねえ…

オキス

「今のはかなりきいたな…」

普通は消滅するほどの威力なんですけどね

オキス

「じゃあ俺の番だな」

ガンブレード

「あなたのターンはありません

ポルテック…」

さっきの魔法より魔力を鎌の先端にためて

ガンブレード

「ブレイカー!」

瀕死の状態では防ぎようはないとは思いますが…

ここに来たときは時雨もいたけど今はどこにいるのか…

クロ

「もう無理だ」

明日は筋肉痛確定だ

ガンブレードは遅いし何なんだ？

もしかしてガンブレードは負けたのかな？

なぜだろう…

ぜんぜん心配じゃない…

もう無理だな

海に落ちるか…

クロ

「はぁ！（ドボ）（ゴン）（ン）」

んん？今の音何？

（ザブ）

……

なにこれ？

オウパが浮いてる

頭から血を流しながら

おそらくこの岩壁にぶつかったのかな？

クロ

「もしかして勝った？」

なら善は急げ

早速縛るとしますか

あ、ガンブレードがないから縄がない

クロ

「仕方ない、泳いで運ぶか…」

時雨

「なにやってんだ？」

あれ？何で時雨が？

岩壁の上に？

クロ

「何でここに？」

時雨

「置いてけぼりされたから泳いでこいつら運んだんだよ」

クロ

「じゃ、上に上げてくれ」

時雨

「仕方ないな…」

ヴァーリヴァンダナ！」

水が、手？になって俺達を岩壁の上まで持ち上げてくれた

クロ

「ありがとう！」

時雨

「いいぞ」

王様と社長

こいつは同類みたいだ

時雨

「まさかおまえの方が早く帰ってくるとはな」

クロ

「終わったのがこの下だしただ走っただけだからな」

時雨

「どうやって倒したんだ？」

クロ

「気づいたら自滅してた」

走ってて限界がきたから止まったらすごい音と共に頭から血を流してたからなにがあったのかわからない
つてかわかりたくない

自分の姿をしてる奴が自滅した方法なんて知りたくない

「ほう、オウパを倒したか」

クロ・時雨

「「!!誰だ!」」

振り向くとどうみても魔王な黒い肌のおじさんがいた
ラスボスですねわかります

ガノン？

「我が名はガノンドロフ
これは使えんな」

ガノンさんでした
そしてあれは…

(キラン)

白いネックレス
あれがジュエルシードかな？

ガノン

「消える」(フツ)

消えた！？
コピーズが消えた！

ん？あのガノンに抱えられてるのって…

ガンブレード

「…うう…」

ガンブレード！？
まさかやられたのか！？

クロ

「ありえない！」

時雨

「顔芸ですね、わかりますwww」

こんな時でもネタを忘れないそれが俺クオリティ！

ガノン

「こいつか？」

ここに来る途中、宇宙空間で拾ったオキスと互角かそれ以上の実力はあるようだなしかし私の前では虫同然だったな」

人でも虫でもないんだけとね？

とりあえず…

クロ

「やるか？」

時雨

「そうだな」

家のデバイスを虫呼ばわりした罪償ってもらっぞ？

クロ

「瞬殺」(フツ)

ガノン

「む？」

敵の背後に回り込み

ク口

「背掌！」

背中に掌底を入れる
が、しかし

ガノン

「スピードはあるが…
それではきかん！」

(バキ)

頬に黒い炎を纏った裏拳を入れられる

ク口

「ぐつはあああああー!!」

10mは飛んだ
駄菓子菓子!

時雨

キラリフル・アストラペー
「千の雷！」

俺が時間を稼ぎその間に時雨が強力な魔法を決める
でもこれって…

ク口

「よし、全力全壊！」

(キィィィ……)

ガンブレード

「ワールド」

(ィィィィィ！)

クロ・ガンブレード

「「ブレイカー！」」

(トトトトトトトトウウウー！)

無数の魔力爆弾がガノンめがけて飛んでいく

ガノン

「ぐ、あああああああああああ！！」

時雨

「目があ、目がああああ！」

たしかに凄い光だ

目を瞑っても真っ白だもん

そしてそれが治まると

クロ

「やりすぎた？」

時雨

「やりすぎだ」

さっきまで崖の上だったんだけど今は海の上です

ガンブレード

「マスター、魔力がもうないので飛ばません」

クロ

「マジで？」

俺も限界

時雨、俺達運ぶの頼んだ」

さっきのでしほり尽くしました、はい

時雨

「俺も疲れているんだが…」

まあお前達程じゃないからいいけどな」

クロ

「そっか、じゃ頼…ん…だ…」（ガクン）

俺は意識を手放した

俺って気絶多いよね？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、時雨

まったくこいつらは…

俺の出番ほぼ0じゃねえか

…やべえ、超悲しくなってきた…

時雨

「とりあえず運ぶか…」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、クロ

クロ

「ん…ん？」

森？ああ気絶したんだっけか？

時雨

「おお気がついたか」

クロ

「ああ、ガンブレードは？」

首元がない

姿も見えない

時雨

「すでに回復して薬局に行った」

クロ

「ここ近くに薬局あったんだ？」

時雨

「一応海鳴の近くみたいだしな」

なんというご都合主義WWW

ガンブレード

「買って来ましたよ」

あ、マスター起きましたか」

クロ

「ああ今な

…何かって着たんだけ？」

ガンブレード

「食料と傷薬です

マスターはボロボロですから」

あ、本当だ

俺の体傷だらけ

多分あれの反動だな

あとは吹っ飛ばされたときに思いっきりすりむいたか
でもそれではここまでではならないよなあ…

やっぱり反動だな

クロ

「手当ては任せる

とりあえず食料」

ガンブレード

「何がいいですか？」

クロ

「ステーキ」

は、ないか…

ガンブレード

「はい、どうぞ」

あつたよ…

どんな薬局だよ…

さっきまでのシリアス返せよ…

え？シリアスじゃなかった？

あれが限界

クロ

「いただきます」

ガンブレード

「時雨さんは？」

時雨

「飲み物でいい」

ガンブレード

「ではこれを」

時雨

「……………なにこれ？」

ガンブレード

「幾つかの薬草と薬品を調合して作った栄養ドリンクです
味は保障しますよ?」

時雨

「色が深緑なんだが…」

(ゴク) おお、なかなか (ドサ) 「

時雨が倒れた

あんなの飲むから…

ガンブレード

「マスターもどうぞ」

その物体Xを俺にも飲めと申すか…

クロ

「さらば青春! (ゴク) ああ、味はなかなか (ドサ) 「

動けません

声出ません

これが植物状態なんだね

ガンブレード

「そういえば調合した薬の中にフグの卵巣がありましたね」

それ毒!

薬じゃなくて毒!

ガンブレード

「スタミナがつくようにと入れたのですが失敗でしたね」

人の体で実験すんなし
てかいつ作ったの？

ガンブレード

「やっぱり歩きながら即興ではやらないほうがいいですね」

買って帰ってくる途中に作ったのかよ！？
てかフグの卵巣とかよく手に入ったな！？

時雨

「……はあっ！死ぬかと思った……」

クロ

「よく生きてたな
ってか治るの早くね？」

時雨

「俺のスキルだ
全てを超越するという簡単な能力だ」

なにそれ怖い

時雨

「お前は？」

クロ

「毒が致死量だったから不死のスキルが発動したらしい」

時雨

「チートだな」

俺も思う

(プンプン)

電話？

誰の？

ガンブレード

「マスター、お電話です」

そついやあつたなあ

『お元気ですか？』

クロ

「堅苦しいな

楽にしゃべれよ」

『そつですか？

なら遠慮なく

元気？』

クロ

「ああ元気だ

ついでさっきあんたからのプレゼントからのプレゼントで死にかけたけどな」

『ほんと？』

あの子に料理教えるの忘れてたわ
多分それね』

それ大事

つてかあんたが何でもできる人にしたのか

『まあ元気そうで何より

ところで今ジュエルシード持ってるよね？』

なんで知ってるし

まだ誰にも言っていないのに

ネタが一つ消えた

クロ

「ああ持ってる

でも何で？」

『あの子に言えば多分デバイスにできるわよ

能力そのままだね

うまく活用しなさいな』

マズデ？

『それじゃまたかけると思うから忘れないでよっ…』

クロ

「忘れないうちに電話よこせよ」

『はいはいじゃね』

切りやがった…
まだ言いたいことはあったのに…

時雨

「どうした？」

クロ

「これ、デバイスにできるらしい
しかも能力そのまま」

時雨

「すごいな（フウ）！」

時雨が半透明になってる

クロ

「いやあああ！
俺幽霊とかダメなんだよ！
こっちくんな！」

時雨

「酷いな…
多分お別れってやつなのに…」

マジで？

クロ

「そなの？
じゃまたいつか」

時雨

「ああそのときは楽しみにしてゐぞ」

バトルジャンキーですね

わかります

クロ

「遠慮したいが…」

まあいいか

じゃ、またいずれ」

時雨

「ああじゃあな」(フウワァ)

消えた

クロ

「夜に出てこないといいいけど…」

ガンブレード

「それはないと思います」

ならよし！

そして家に帰り、今までのように事件に巻き込まれていく
新しい仲間とともに

初コラボ！魔法少年と七人の使者 その2（後書き）

あの七人はA・sから出てくると思いますが
自分でキャラ増やして大丈夫なんだろうが…

クロ

「考えなしだからこうなる

皆さんはこうはならないようにがんばってくださいね」

酷くない？

消すよ？

クロ

「できないくせに言うな」

まあそうなんだけどね？

とりあえず！

A・s編をお楽しみに！

クロ

「その前に無印終わらせる」

その前にまったく更新してないほかの小説を更新してからね

影流

「出番か！？」

存在を忘れかけてた主人公登場

影流

「酷っ！」

次は君らだから喜べ

では皆さん

次の話を

クロ

「お楽しみに」

俺のセリフ

第八話 イヤッファー！（赤髭風）（前書き）

作者

「残念番外編です」

クロ

「バカなの？死ねよ？」

作者

「ひでえよ

理由は簡単、これを見よ！」

（；「ー」）ジー

（ ）ゴシゴシ

（ 。 。 ）

クロ

「PV10000、ユニーク20000!？」

作者

「ついに…ついにだ！」

クロ

「お前の小説中で最高じゃね？」

作者

「そつなんだよ」

で、記念に何かしようかな？
みたいに考えてるんだけど、なにかいい案ない？」

クロ

「かんがえなしか！？」

作者

「それが俺！」

クロ

「はあ…」

では本編をどうぞ

作者

「え！？」

じゃこれなに！？」

クロ

「前書き」

作者

「書くところ間違えたー！！！」

クロ

「バカは無視して本編へ」

クロ・ガンブレード

「」「」「ぶっぞー！」

第八話 イヤッファー！（赤髭風）

クロ

「調子はどうだ？」

プレシア

「なかなかよ」

それはよかった

あの後すっかりと食事をとり

睡眠もしっかりととっているプレシアは、元気になっていた

プレシア

「それにしても、フェイトに友達ができてよかったわ」

そういえばアリシアの蘇生は成功して、ジュエルシードがいらなくなったので、フェイトに謝罪もかねてなのはに渡すように言ったところ

なんかなのはさんはいいいいこみたいであっさりと受け入れられたらしい

クロ

「いや」

よかったよかった」

プレシア

「本当によかつた……た……わ……」(ドサ)

え？なに？どうしたの！？

クロ

「先生！この人は…この人は治るんですか！？」

ガンブレード

「誰が先生ですか誰が

おそろくなにかの病気じゃかないでしょうか…」

アリシア

「おそらくこのまま放置すれば死ぬでしょうね」

ガンブレード、ナイスツツコミ

そしてリアルバーロー、自分の母なんだから心配してやれ

ガンブレード

「とりあえず検査してみますか」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

アリシア

「ふう…

しばらく動いていなかったなので検査だけでも疲れますね」

やけに落ち着いてるなリアルバーロー

ガンブレード

「検査の結果は肺癌です

しかも末期の」

クロ

「よつするに?」

アリシア

「現代医学での治療では効果は皆無ですね」

マジで!?

死ぬのか!?

クロ

「先生!どうにかして治してやってください!」

ガンブレード

「だから先生じゃありません

そうですね、後数日で治るでしょう」

クロ

「そんな...!」

え?」

アリシア

「私とガンブレードさんの技術を合わせれば簡単です

むしろ後三カ所ぐらいに転移していても可能です

まあ、母さんの場合全身に転移していますが...」

そこから後三カ所とか体に新しい部品を取り付けなくちゃいけない
じゃないか

クロ

「でもどうやって治すの？」

ガンブレード

「魔力を送り込んで癌に侵されている部分だけを腐敗させ、それを取り除き、さらに細胞を活性化させて少し余った癌細胞の残滅と細胞の再生を促進させれば」

アリシア

「1日で治療は完了します

ただし、動く細胞がうまく結合しなかったりするので、しばらくの間は安静にしてください」

なにそれ？

クロ

「ようするにこの人は助かるんだな？よかったな！（トン）」「ゲボオ！」先生！早く治療を！」

数日後、アリシアは管理局に投降し、何日か刑務所に入ることになった

そして、なのはとフェイトが楽しそうに話していたのでそれを微笑ましいと思った次第

後、なんかムカつく黒色がいたので黒・魔・導　してやった

そしてなのは家には新しく俺の小屋ができた

猫用だけどなかは広い

普通になのはが友達とか連れてくるからビックリだ

その時に外にでて暇を持って余していると空から人が…

その時に手に入れた白い宝石はガンブレードによってデバイスに改造されて、なぜかアリシアが持つことになった

理由はプレシアからデバイスを作ってやって欲しいという電話が来たからだ

あんなチートなデバイスほかにねえよ
ガンブレードを除いて

そして今、図書館に来ている
理由は簡単

クロ

「暇なので学校に行こう」

ガンブレード

「いきなりですね」

まあいいじゃん

勉強は嫌いだけど、暇を持って余しすぎるのもキツいんだ

クロ

「はい勉強勉強
ん？」

車いすに座っている色違いシャング発見
いや、こっちがオリジナルだよな？

ク口

「無視無視」

「かわいい女の子が困ってるで〜」

自分で言うなし

俺は転入試験の為の勉強をしにきたんだ！

ク口

「え〜どこにあるのか…」

「手伝えや!」

ク口

「頑張れや!」

「足悪いんや!」

ク口

「それはかわいそうに
だが断る!」

「裏に情報回したる…」

怖い怖い

この頃の小学生は怖いね

近頃なのはもフェイトと遊び始めてからなんかいい笑顔になること
が増えて、比例して俺のライフが0になることも増えた

仕方ない、てっだってやろっ

クロ

「どれをとればいいんだ？」

「あれ」

クロ

「ほい、さようなら」

「ちようまち」

なにさ？

「兄ちゃんみんなかおやな

どや？家で飯でも食べへんか？」

クロ

「よろこんで」

だって高町家だとキャットフードだから

「そうか

うちははやて、八神 はやてや」

めっさ聞き覚えある

でもなんだっけ？

まあいいや

はやて

「うち、料理には自信あんなん」

クロ

「マジか、楽しみだ

いつもキャットフードだから」

はやて

「どんな生活してんねん…」

ネコ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

はいつきました

またでかい…

この頃は金持ちが多いのか？

はやて

「まあ入り」

クロ

「お邪魔」

(ジャキ)

え？なにこれ？

なんで武器を突きつけられてんの？俺

「主、このものは？」

「怪しい奴は殴るに限るって」

はやて

「やめ、お客さんや

シグナムもヴィータもそれおろし」

なるほど、この危ない人&ロリータはシグナムとヴィータね

なんか舌を噛みそうな名前だな

「あら、はやてちゃん

お帰りなさい

その人は？」

「……………」

はやて

「名前は…なに？」

クロ

「クロ」

はやて

「本名は？」

クロ

「忘れました」

はやて

「マジメに答えてな？」（ジャキ）

またですか

しかも狼まで臨戦態勢

クロ

「マジで忘れた

それになんか思い出したくない」

はやて

「そうか

あ、紹介まだやったな

シグナムとヴィータとシャマルとザフィーラや」

シグナム

「よろしくたのむ」

シャマル

「よろしくです」

ヴィータ

「きにくわねえ面だな」

ザフィーラ

「……………」

今ロリータになんか言われなかった？

クロ

「えっとシグナル、おまる、ロリータにザフィーラね」

シグナム

「私はシグナムだ」

シヤマル

「おまるってなんですか？

なんでザフィーラだけ覚えてるんですか？」

ヴィータ

「気にしてることを…！」

ザフィーラ

「……………」

ヤバス

ヘルプはやて

はやて

「まあまあやめたり」

クロ

「いままで気に入くわないと思ってたし性格悪いと思ってたけどありがとう」

はやて

「やってまえ」

あつるえく？

なんでさ？

ヴィータ

「リンカーコア回収してもいいよな？」

はやて

「許す」

なにそれ怖い

(ガシ)

四肢を抑えられた

オワタ

(ズボ)

ギヤアアアアア！！

手が、手が入ってくるよおおおお！！

(ズブ)

ぐはぁ！

気絶

地味に効く…

第八話 イヤッフィー！（赤髭風）（後書き）

気絶（笑）

クロ

「うるへえ」

なんとなくーく

キャラ紹介の付け足し

クロは魔力はなのは級にある

が、頭が残念なため、扱い切れていない
やはりガンブレードのサポートが不可欠

クロ

「マジか…」

ガンブレード付け足し

実はえげつなく強い

SLBなら片手で防げる

クロ

「マジですか？」

アリシアの紹介

クールな学者

幽霊の時にプレシアの部屋にある資料などを読んでいた（投資能力

あり）ため知識は豊富
見た目は小学生
頭脳は賢者

クロ

「マズカ…」

こんな感じ
ではまた

クロ

「え」と、俺の運勢は…（ペラペラ）
あ、災難の相が…」

第九話 秋の日に（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません！

クロ

「まったく、誰かに作者を変わってほしいよ」

やめて！

この小説が無くなったら俺は…

俺はあああ！！

クロ

「わかった、わかったからマジ泣きすんな」

嘘泣きだ

だまされてやんのWWW

クロ

「ガンブレード、行くか」

ガンブレード

「了解しました」

え？なんでマジシャンモード？
ってその技は！

クロ

「黒・魔・導！」

ガンブレード
「改」

まだ本編では使ってな（ズドオオオオ！！）ギャアアアアッス！！

クロ

「では本編を」

ガンブレード

「どうぞ」

第九話 秋の日に

あゝきが来ゝた
あゝきが来ゝた
と、言うわけで

クロ

「食欲の秋！」

ガンブレード

「秋はもう終わりますよ？」

クロ

「わかってるよ」

はやて達にあつて数日

はやて達の手伝いをしたり、はやてのについて行ったり
高町家から逃げ出したり。

色々充実してます。はい

クロ

「食欲の秋ももう終わり
だがしかし！」

俺は秋をまったく堪能していない！」

プレシア

「だからなんなの？」

いきなり出てくんなし

クロ

「もう出所したんだ？」

プレシア

「ちょっとした仮出所よ

今回で問題を起こさなければ晴れて出所よ

やっと2人に顔向けできるわ」

そっぴやあの2人は管理局がどうたらとか

世の中の今の常識を身につけるので、面会なんかしてないもんな

クロ

「嫌われてるとか思ってたないのか？」

プレシア

「そんなわけないわ

フェイトはきつく当たっていた私でさえ母親だと思ってくれてたし、

アリシアは昔から私にべったりだったから」

すごい発想

アリシアに関しては何もいえない

クロ

「アリシアはプレシアが死に掛けたのに超冷静だったなんて言えない」

プレシア

「全部で出てるわよ？」

まあ気にしないけど」

なんかすごい一家だな…

クロ

「で、期間は？」

プレシア

「一週間よ

その後三日で出所予定

問題は起こさないですよ？」

クロ

「勝手によってくるんだよ」

マジで何なのか…

あの肌黒魔王の時だってなぜかなのははかかわってこなかったし、
こっちに来てすぐにジヨエヌ…いや、ジヨセフ…まあなんか青い宝
石の事件に巻き込まれたしね

プレシア

「だいたいあなたのせいなのね」

クロ

「そんなことは……ない？」

プレシア

「自身なしじゃない

じゃ、あなたといると面倒な事になりかねないから行くわね」

クロ

「あいあい」

プレシアは去っていった

クロ

「で、どうしようっ..」

「さあみんな参加しろぉー！」

クロ

「ん？」

「大食いバトル開催だよー！」

参加費用は千円！

優勝賞金は参加人数によってじょうげんするよー！」

参加決定！

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「よゝい、スタート！」

(シャクシャクシャクシャクシャクシャクシャクシャク)

まさかスイカとは...

今は秋なのに...

だがしかし！

クロ

「残飯改修機の異名をとる俺をなめるなあー!!」

ガンブレード

「マスター、それは引きます」

だつてみんなにこれ食べ!つて毎日食べ残しを食べさせられたからな
さらに女子から弁当をやたらともらつて断るに断れずにけっきょく
食べてた

その後よく先輩にボディーブローされたっけなあ…

「終了!」

あ、終わった

まだ食い足りない…

「優勝はクロ!

なんと二位の二倍の量を食べきつたあー!」

マジで?

もしかしてこれって特技じゃね?

「じゃあ優勝賞金は…

なんと五十万円!」

多!?

多すぎる!

「おめでとじー!」

クロ

「あざっす」

では路地裏へ

クロ

「ガンブレード」

ガンブレード

「何ですか？」

人型へ

クロ

「これどうする？」

なにかほしいものはないか？
使い道に困るから」

ガンブレード

「ならアイスを食べに行きましょう！」

季節外れですよ？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ガンブレード

「十五段二つ」

頼みすぎ

「は、はいどござい」

グラツグラ

今にも倒れそう

「ああ！」

店員が躓きやがった

(ベチャ)

ガンブレードはご立腹

アイスを台無しにされたからだ

その後は服を買いに行った

だがなかなかいいものがなかったため、結局バリアジャケットで代用した

なのになぜかまだ人型のガンブレード

本当に何でもできるんですね

ガンブレード

「次はバイキングでも行きますか」

クロ

「あそこはどうだ？」

(テラ盛りフルコース！

全部食べきれば無料です！)

ガンブレード

「行きましようか(ニヤリ)」

クロ

「ああ（ニヤリ）」

まだ腹3分目だ

（三十分後）

クロ

「ああ、もう無理だ」

ガンブレード

「そうですね」

クロ

「食料の在庫が」

どうやらテラフルコースは食料全部のようだ

だがしかし、これたちの前では幼稚園児の前にあるお菓子も同然

「うう、参りました…」

計画通り…（ニヤリ）

さて

クロ

「次はどこに行こうか」

ガンブレード

「そうですね

生活用品でもかって居候でもさせてもらいますか」

それははやて家だよな？

それってヤバス

死亡フラグがビンビンだ

でもやっぱり

クロ

「家がないときついでので採用」

シャンプーとリンスとボディソープと後は…

クロ

「ガンブレードに任せる」

三十万はあまつてるから十五万は渡そうかな？

そんなこんなではやて家へ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

はやて

「なにこれ？」

クロ

「大量に金が余ったので、これをネタに居候させてもらおうかと」

はやて

「OKや

生活用品はちよくちよく使うしな

それに手伝ってくれると嬉しいわ」

意外とあっさり受け入れられた

本のページを埋めると願いが叶うらしい

それではやての足を治すんだそうだ

別にイヤでもないし、むしろ暇つぶしが出来るので好都合

明日からロリータにやりかたをご教授してもらおう予定

俺だってガンブレードがいれば強いんだからな！

頭がパーなだけで魔力は多いんだぞ！

ん？ガンブレードに頼めばもしかして…

(ニヤリ)

ヴィータ

「キモイ顔すんな」

だからって顔面に鉄球撃ち込むな

第九話 秋の日に（後書き）

と、いうわけで
はやて側へ

クロ

「なんかとてつもなくヤヴァイ気がする……」

では今日は投稿が遅れているので他の小説も書かなくてはいけないので終わります！

クロ

「行きやがった…」

あ、今キャラクター人気投票をしていますよければ投票してやってください」

ガンブレード

「ついでに暫定一位は私です」

クロ

「では皆さんの投票を」

クロ・ガンブレード

「お待ちしています…」「」

番外編？お知らせ？（前書き）

今回は皆さんがこれから見るかどうかの瀬戸際へ

番外編？お知らせ？

作者

「てなわけで注意事項です」

クロ

「どうしたんだ？」

作者

「YouTubeでなのは動画が消えたから原作がわからない」

クロ

「一大事じゃねえか！」

作者

「よってこれからは大体しか原作わからないから用語は友達から、ストーリーは完全に捻じ曲げてお送りします」

クロ

「やめろ

崩壊する」

作者

「仕方がないよ
原作がわからないんだから」

クロ

「どこかで探せ」

作者

「無理だ

過去にいければパソコンにロードするけど、そんなことは俺には不可能だ」

クロ

「はあ……」

作者

「よって他の小説を読み漁り、そこから原作を組み立てるのでかなり投稿が遅れると思います」

クロ

「マジでか……」

ガンブレード

「マスター、保存は完璧です」

クロ

「そうか

じゃ、俺は音楽を総合108曲聴いてくるわ」

作者

「逝ってらっしやい

俺はこれからどうしよう？

原作知識は完全に皆無なので、原作は間違いなく崩壊します

覚悟していてくださいな」

（ズドオオオ！！）

作者

「なのはさんから贈り物
SLBが五発だつて

ぎゃあああああああ！！」

食らつた

番外編？お知らせ？（後書き）

てなわけでこれからは原作は完全に崩壊しますよ

ここはやっぱり

「後悔する前に回れ右」

第十話 崩壊（前書き）

遅れてすみません！

でもこれから遅れると思います

他の小説も書かなきゃいけないので…

今回から原作が崩壊していきます

ストライカーズは今のうちに原作を確保しておきますので安心して
ください

第十話 崩壊

クロ

「はやて家に住み始めて約数日、俺はこれでいいのか？」

はやて

「完璧や」

雑用している俺にそんな言葉をかけるはやて
しかし

クロ

「料理も、掃除も、庭の整備も、デバイスの管理も俺の仕事ジャマ
イカ」

ガンブレード

「デバイスの管理は殆ど私の仕事なんですけどね」

クロ

「俺にはデバイスの知識がないから仕方がない」

なのに毎晩1人ずつデバイス渡されて大変なんだよ
ガンブレードは俺にやり方を教えて寝るときもあるし、結局は俺
の仕事にもなってるんだよ

そして今は床掃除中

一日の起きてる時間の七割は雑用の時間

はやて

「じゃあ私図書館行ってくるな」

クロ

「ひゃい…」

さてさてどうなることやら…

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

終わった…

ガンブレード

「やっと終わりましたね」

クロ

「そうだな」

三時間はかかったと思う

だがしかし！

そのぶん成果は上々

クロ

「さてさて次はトイレ掃除………」

何も聞いていない

何も見ていない

結果が張られるところなんて知らない

クロ

「さあ！

トイレ掃除の始まりだ！」

ガンブレード

「なんですか

魔力反応あります

この感じはヴィータさんですね」

クロ

「なんのことかな？

さあさ、とりあえずトイレ掃除しましょ」

ガンブレード

「とぼけないください

行きますよ」

嫌でござる〜

行きたくないでござる〜

首の襟を引っ張らないでほしいでござる〜

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

で、エターナルロリータ発見

途中は省く

クロ

「何やってんだ？」

ヴィータ

「!!」

てめえ…

喋れば殺す」

クロ

「イ、イエツサー」

キヨワイ…

ヴィータ

「せっかくだからてめえもこい
少しなら役に立つかもしれない」

やっぱり雑用

母よ、私は元気です

ん？お母さんなんていたっけ？

ダメだ…

なのはさんにあつてからの記憶しかない…

え？なんでさん付けか？

ご想像におまかせしま…

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

で、つれてこられたんだけど…

なのは

「何でそっちにいるのか教えてね？」

なのはさんに O H A N A S I I されています

ヴィータ

「てめえ、敵かよ」

されにエターナルロリータにも

なのは

「とりあえず」

ヴィータ

「一時休戦だな」

よかった、助かった…

なのは・ヴィータ

「「まずはクロさん（こいつ）からの（だ）」

死亡確定

（ゴスガスゴスガス）

（ズドオオオ！！）

なのは

「じゃあ再開なの」

ヴィータ

「潰してやる」

ガンブレード

「あれ？マスターが消えましたね」

ガンブレードよ

ここですよ

ガンブレード

「変わりにつぶれた巨大なトマトがありますね」

それ俺

ガンブレード

「焼却処分にしますか」

やめてえええええ！！

クロ

「お、俺だつて……」

ガンブレード

「なんだ

マスターだったんですか

気づきませんでした」

不死のスキルで何とか喋れたけど
まさかの気づかなかった宣言

ガンブレード

「放り投げる寸前まで気づかないふりのほづがよかったですね（ボソ）」

聞こえてるよ!?

気づいてたの!?

酷いね君!?

ガンブレード

「とりあえず直しますね」

笑顔が怖いです

大体考えていることがわかる

多分「もう一回いたぶるためにも直しましょう」「とか考えてるんだ
どうせそうなんだ

ガンブレード

「はい、治りましたよ

全身骨折していて、内蔵もぐちゃぐちゃで何がなんだかわからなくなっていました」

クロ

「よく治せたな!？」

ガンブレード

「簡単ですよ

一旦死ねば戻るでしょ？」

殺したのかー!!

クロ

「殺すなよ！」

ガンブレード

「不死は死ななきゃ発動しませんからね
なので脳を「それ以上は言わないで！！」なぜですか？」

グロさに耐えれないからです

クロ

「そりゃ一旦死ねば不死の力で体は全部治るよ？
でも死ぬのはいやなんだよ！」

ガンブレード

「なぜですか？」

クロ

「そりゃ死にたくないよ
一回シグナムさんに斬られて死んだら一週間気絶しっぱなしだった
んだから！」

ガンブレード

「そついやそつ言うこともありましたね」

多分死ぬときの酷さだと思う
まさに木っ端微塵に切られたから

今回はガンブレードが起こしてくれたんだと思う

クロ

「で、あっちはどうす（ゴスゴスゴス）メパア……」

顔がへこみました

クロ

「鉄球が飛んできたよ

ヴィータ！気をつけ（ズオオオオ）rrrrrrr!!」

なのはさんのディバインバスターが飛んできました

クロ

「なぜこうなる?」

ガンブレード

「マスターには不運のスキルがついてるんじゃないですか?」

まぢか…

至急装備の見直しをしなければ…

(ピュピュピュ)

携帯DA!

クロ

「はい、もしもし」

(おう！私だ！

神だ！)

毎回喋り方が違うのは勘弁してほしい

神

(今回はお前にいいものを渡そうと思ってな！)

クロ

「なに？もらえるものならもらっしょ？」

一部を除いて

神

(え〜とこれこれ
はい！)

クロ

「え〜なにになに？」

(デバイス強化用チップ十枚セット)

クロ

「これ何？」

神

(デバイスを強化できるチップ
一つのデバイスに一つだけ使えるぞ！)

そんなアーケードのカードゲームみたいな説明されても…

神

(使い方は簡単
デバイスに吸収させる)

そんな機能あるの!?

神

(近づければ多分吸収するよ)

適当!?

クロ

「じゃあ一旦ガンブレードに」

ガンブレード

「はい」

(キーン)

なんか吸収された

ガンブレード

「……なるほど

こういうわけですね」

クロ

「どづいつわけですか」

ガンブレード

「これはデバイス自体に魔力を持つ機能を追加して、使用者が魔法を使用する際にその魔力を使って強化することができる物のようです」

なんてチート

ガンブレード

「ついでに魔力は術者から少しづつ吸収してためます」

マジカ…

ん？

クロ

「ガンブレードには意味がないんじゃない？」

ガンブレード

「私の場合、容量が強化されました」

ぬわんてチート

神

（じゃあ、他のやつにも使ってやれ）

切りやがった…

クロ

「でも危なっかしいので、いざというときに使おう」

ガンブレード

「そうですね」

一度の使用で最大容量が術者と同じぐらいになりますからね」

それってドンだけチート…

クロ

「じゃあ！」

ガンブレード

「私達も参加しますか！」

で、あの2人の中に突入した

第十話 崩壊（後書き）

やってしまった…
これからどうしよう…

第十一話 悲しい主人公（前書き）

遅くなつてすいません！

やっぱり原作がわからないって苦しいですね
ネガさん、情報提供ありがとうございます

では

どうぞ！

第十一話 悲しい主人公

前回のあらすじ

2人の間に飛び込んだ

2人の間に飛び込んだ

大事なことなので二回言いました

そして…

クロ

「ゴペエ、これどう思ペア」

ガンブレード

「何を言ってるのかがまったくわかりません」

仕方ないよ

いる場祖がいる場所だもん

今いる場所？

ピンクの弾と鉄球が飛び交う2人の魔法使いの間

クロ

「準備はいいか？ペア！」

ガンブレード

「いいですよ」

クロ

「では先生お願いします」

ガンブレード

「先生ではありません
はあ…プロテクション」

聞いた感じは普通だよな？
ところがどっこい

クロ

「360°全方向からの攻撃を防ぐことができるんだ！」

しかも隕石ぐらいならかすり傷一つつかない強度と来た

ガンブレード

「誰に説明してるですか？」

クロ

「自分、確認のために」

ガンブレード

「はあ…」

で、どうするんですか？」

どうするも何も

クロ

「力だ…！力を手に入れたぞ！
みたいな感じになってノリだけで乗り込んだのに考えてると思うっ？」

ガンブレード

「マスターはバカなんですな」

クロ

「バカって言った方がバカなんだぞ！」

ガンブレード

「マスターも言ってるじゃないですか」

クロ

「あ……」

ダメだ……

やっぱり勝てない……

じゃなくて

クロ

「どっにかできる？」

ガンブレード

「そうですね

このプロテクションは移動はできませんし、中からもブロックしますからこれをとかないといけませんね」

なるほどなるほど

クロ

「じゃあ出た瞬間に一気に移動してどちらかを気絶させよう」

なのはさんは後が怖い

でもロ……もといヴィータは後が怖いどころじゃない

クロ

「消去法でなのはさんで」

ガンブレード

「わかりました準備をしますね
できました」

早い

早すぎる

所有時間一秒もない

ガンブレード

「では解きますよ」

解けたら、早く動いて、なのはさんの後ろに回って攻撃
よし、イメージはできた

ガンブレード

「はい！」

素早く移動すれば弾の間をすり抜けることができるはずだ

クロ

「うおおお！ボボボボボボボボボボ！」

ダメでした

出た瞬間は周りを取り囲むように弾幕が…

なのは

「クロさん！」

ヴィータ

「猫！」

そういえば呼び方猫だったなあ…
じゃなくて

クロ

「狙った…だろ…」

なのは・ヴィータ

「うん（ああ）」

はもった…

クロ

「ガンブ…レー…ド…」

ガンブレード

「何かありましたか？」

顔が笑ってる

ものすごく笑ってる

100%わざとだ…

ガンブレード

「とりあえず回復しまして…
では改めて、止めますか」

クロ

「ついさっきまでポッポだった主人をよく無視できるね」

ガンブレード

「いつものことですし」

そりゃないよ…

なのは

「はああああー!」

ヴィータ

「おおおおおー!」

むこうはかなり白熱してるし…

(ズドオオオ)

クロ

「グボア!」

被弾

クロ

「止めれそうにないんだけど…」

痛いし…

ガンブレード

「いいから行きますよ」

いつのまにか人型になってた
てかひつぱらないで！

ガンブレード

「はあああ！！」（ブン）

投げないでえ〜！！

クロ

「A a a a a a a a a a！！」

ロリッコの方に投げられた

ん？ロリッコのお気に入りに？の帽子が無いような…

ヴィータ

「おらあ！！」

女の子がそんなはしたない声を出すものじゃありません（ゴシヤ）（ンン）
バアアアアア！！

ガツツリ殴られて、しっかり吹っ飛ばされた

なのは

「え！？キヤアアアア！！」

そして思いつきりぶつかった

そこの2人ハイタッチしてんじゃねえよ

今のコンボはどこ配管工の兄弟だコラ

(ドゴオオオ！)

ビルにぶつかった
てかめり突入した

なのは

「ぐ…う…」

ヤッバイ

なのはさんを下敷きにしていたようだ

今すぐどかなければ(ボキ)…嫌な音過ぎる…

岩に挟まれた腕を動かしたら今の音がなっちゃいました
要するに骨折ね

ヴィータ

「さて、覚悟しろよ？」

危なさMAX

誰かヘルプミーー！！

ヴィータ

「おらあ！」

オワタ¥(^o^)/

(ガキイン)

お？天の助け？

フェイト

「なのは、大丈夫？」

ユーノ

「遅くなってゴメン」

救世主キターーーーーー!!!

クロ

「ギリギリセーフだって
マジで死ぬかと思ったよ」

フェイト

「……………そ、そう……
ごめんなさいね？」

反応がおかしいって

なんか知らない人に話しかけられたみたいな……………ん？

クロ

「まさか……な……
俺の名前は？」

フェイト

「え〜と……
猫柳？」

クロ

「どっかで聞いたことあるけどぜんぜん違うぞバーロー」

ユーノ、お前ならわかるよな!？」

お前ならわかってくれると信じてるぜ!

ユーノ

「……………もちろん!」

クロ

「今の間はなんだー!！」

ヴィータ

「コントしてんじゃねえよ」

ヤツベ、忘れてた

そのお礼もかねて

クロ

「加勢する」

ヴィータ

「?あいつらの仲間じゃねえのか?」

クロ

「名前を忘れられたようだから思い出してもらおうまで!」

力で示し、記憶を呼び覚ます!

ちょっと調子に乗りすぎました。すいません

ガンブレード

「マスター、大丈夫ですか?」

フェイト・ユーン

「あ、ガンブレードさん」

なんでそっちはわかるんだー！！

君ら人型見たことありましたっけ！？

俺の影どんだけ薄いんだよ！

ガンブレード

「マスター、どうします？」

クロ

「とりあえず、名前を思い出してもらえらるまでボッコで」

ガンブレード

「了解しました」

よっしゃあ！

レッツフルボッコ！

(((((ジャキン))))))

え？

フェイト

「とりあえず邪魔だから」

ヴィータ

「足手まといになる前に消す」

ユーノ

「さっきなのはに覆いかぶさってたけどあれはなんなんだ？」

ガンブレード

「とりあえずマスターで試しうちさせてください」

なのは

「クロさん…」

頭、冷やそうか？」

俺、絶対絶命

クロ

「待て、話せばわか^{ストオオオオオオ}「ゴボオオオオオオ！」」

（キュピーン）

俺は星になった

なぜこうなった…

第十一話 悲しい主人公（後書き）

え、他の小説が放置になっているため
それらを死ぬ気で更新しようと思います
なので、また遅くなると思います
へたすれば一ヶ月とかかかるかもしれない…
でも二日で終わるかも知れない

なのでまた待たせることになりますがまっけていてください！

追記

更新速度が尋常じゃないくらいに遅くなっている……
このままだと一ヶ月に一話とかにもなりかねないですね……
もう少し原作を把握してから書くべきだった……orz

第十二話 師匠ができた（前書き）

さて、書いてる期間が長くて自分で何かいてたか忘れてしまいました

なのでこの後は今までの話を振り返ってみようと思います

ではごきげん

第十二話 師匠ができた

ん……ここは？

つていつでも放置かはやて家かなのは達つれてかれたかのどれかだ
けど

しってる天井だしはやて家だな

はやて

「目、覚めた？」

クロ

「ああ、体中が痛い……」

はやて

「大丈夫か？」

まあ今日は早めに休み
疲れてるやる？」

……………は？

クロ

「はやて、お前本当にはやてか？」

もしくはどこかに頭でも打ったか？」

はやて

「殴るで？」

さつきシャマルが検査したら疲労がたまってるっていつてたから早
めに休みって言うてるだけや

大事な雑Y…家族が減ったら悲しいやる？」

さいですか……

にして対応が変だ

なにか変だ

ここまで優しくされたのは初めてだ

これは明日何かあると考えると間違いは無いだろうな

シヤマル

「はやてちゃんお風呂の用意できたわよ

ヴィータもいつしょに入っちゃって」

はやて

「わかった

クロ、シグナムが話しあるらしいから聞いたげてな？」

ついに呼び捨て

完全に召使状態だ……

にしても話し？

O H A N A S I I じゃなきゃいいんだが……

クロ

「シグナムさん、話して？」

シグナム

「いやな

お前がやられた後私も駆けつけて交戦したのだが……

深いキズを負わされた

これだ」

シグナムは服をめくりキズを見せた
スタイル抜群…ゲフンゲフン！
酷いキズだ……

クロ

「うわぁ……」

酷いキズ……」

シグナム

「私の甲冑を貫いたのだ
いい師に教わったのだろう」

クロ

「うんうん」

多分キズからしてフェイトかな？
切り傷っぽいし

クロ

「でも何でそれを俺に？」

シグナム

「一応な

お前がどれほど強いのかは未だ見せてもらっていない
とにかく気をつけろということだ」

あれ？

でも俺とあいつらが知り合いだって知ってるんじゃないの？

クロ

「それぐらいなら俺もあいつらと知り合いだから知ってるよ
たぶん俺じゃ勝てないことも」

ガンブレード抜きだと

シグナム

「そうか

だがお前の魔力は高い
腕を磨けば強くなれるはずだ」

それがね？

なんかね？

ダメなんだよ……

色々試したけど結局ガンブレードの力借りなきゃいけないんだよね

シグナム

「そして向こう側はこちらを探ってくるだろう

そうすると主に危険が及ぶ

そこでだ」

え？なにになに？

まさか……

シグナム

「私が剣を、魔法を教えてやるっ」

なんてこつたい！

そりゃ未来が決定したようなもんだ！（確定した未来、瀕死）

クワ

「俺がシグナムさんの修行に耐えられるとでも？」

シグナム

「主を守り、主の足を一刻も早く治すためだ
耐えろ」

この人こんなは無茶言う人だったんだ

クロ

「拒否権は？」

シグナム

「ない」

こうして俺の（地獄の）訓練は幕を開けるのだった

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

次の日の夜

シグナム

「準備はいいか？」

クロ

「はい」

死ぬ準備はできました

ガンブレード

「手をかしましょうか？」

クロ

「いや、それだと苦しみが長引くから」

主に回復& a m p ;プロテクションの弱体化で

ガンブレード

「わかりました

ではがんばってくださいね」

クロ

「わかってる

死なない程度にはがんばるよ」

いくらなんでもわざと負けるのはダメでしょう
ってなわけで

クロ

「本気でいきますよ！

ガンブレード！！」

ガンブレード

「了解」

なんか久しぶりだな

このBJとガンブレードの感触
燃えてきたー！！

シグナム

「どちらにしる容赦はせん！

いくぞ！」

クロ

「はい！」

シグナム・クロ

「「おおおおおおお！！」」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

シグナム

「ふむ、大体お前のことはわかった」

クロ

「……………」

シグナム

「さて、本番といくか」

クロ

「……………こ、これなんて無理ゲー……………」（バタ）

シグナム

「なさけない

あの程度で音を上げるようなら
しっかりと鍛えねばな」

俺気絶しすぎじゃね？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

クロ

「はっ！ここは八神家！？私はクロ！？」

はやて

「ずいぶんはつきりしてるな」

今しがた目が覚めました

俺の命が後どれぐらい持つか……

シグナム

「む？起きたのか？

なら行くぞ」

どうやら今日までのようだ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

シグナム

「今日はここまで

お前はスタミナが足りないな

町内を走って来い」

クロ

「……………」

い、生き延びれた……

走ってこいってこの体で走ったら100%激痛&キズの悪化するよ
でもいかなきゃ殺されるからいってこよう

ガンブレード

「とりあえず回復魔法をかけますね」

ああ、ガンブレードの存在の大切さがわかる瞬間だ……

クロ

「よし、行くか」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

と、言うわけで走りこんでたんだけど

クロ

「久しぶり」

プレシア

「そうね

元気にしてた？」

クロ

「いや、死に掛けてた」

まさかのプレシアに遭遇

プレシア

「どんな暮らししてるのよ」

クロ

「下僕」

プレシア

「苦労してるのね」

あっはっは！

あれ？目からしよっぱい水が……

クロ

「で、なんでここに？」

プレシア

「このあたりに越してきたのよ
管理局に協力も依頼されてるしね
アリシアも一緒よ？」

マジカ……

クロ

「じゃあご近所さんか」

プレシア

「そうね

あ、そういえばフェイト達があなたの事探してたわよ？」

おおーっと触れられたくない話題だ

プレシア

「あなた何したの？」

クロ

「ちょっとした手助け」

プレシア

「とんでもない手助けにしか思えないわ……」

俺はどんな認識なんだろう？

まあいいや

クロ

「じゃあ走りこみの最中だからこれで」

プレシア

「トレーニングでもしてるの？」

クロ

「鬼教官の所でね」

そのまま一周して帰ったらシグナムさんに後99周して来いって言われてまた走りこみに出た

最後には完全に深夜で誰もいなかったものっそい寂しかったです。はい

第十二話 師匠ができた（後書き）

やっちまいました

クロがどこまで強くなるかは……

アンケートで

ネタバレしないようにできればメッセージでお願いしますね

1、最強

2、つおい

3、戦力外ギリギリ

4、ガンブレードがいなければ役立たず

のどれかです

ついでに今は4だと思ってくださいね

皆さんの投票お待ちしてます！

第十三話 サンドバック (前書き)

今回は色々ありましてごちやごちやです
なにかあったか？

ご想像にお任せします

第十三話 サンドバック

クロ

「し、死ねる……」

ガンブレード

「マスターは死なないから大丈夫です」

いや……精神と肉体は回復しないからね？
ギリギリの状態に戻るだけだからね？
肉体の疲労は消えないからね？

シグナム

「む？死なないのか？
ならもう少しきつくするか……」

この人が居ること忘れてたー！！

ついでに今は別世界？でシグナムさんに修行といっちなサンドバックしてもらっていたところ
今準備運動と力量を測るためと称した模擬戦（一方的なフルボッコ）
が終わったところ

シグナム

「ふむ……なら防御面を鍛えるか
攻撃に関しては役立たずどうぞんだからな」

酷いツス& a m p ;死ねるツス

シグナム

クロ

「……………」

俺目がつつろでポッロポロだもん

その後シャマルに治療してもらい、はやてに気になっていたことを聞いた

クロ

「なにか頼み事でもあるのか？」

はやて

「なんで？」

クロ

「このごろ態度が違うだろ？
だからなにかあるのかと……………」

妙に優しいし、気を使ってくれるし……………」

はやて

「あ、バレた？」

やはり何かあるのか……………」

クロ

「まあできる範囲ならなんでもするよ？」

はやて

「いや、このごろシグナムが楽しそうやからな？」

で、楽しそうにしてるときは大半クロがボロボロやから……
まあ、謝罪の1つ?」

なんだそんなことか

クロ

「気にしなくていいぞ?」

はやて

「え?」

クロ

「だって俺はシグナムさんに修行つけてもらってるほうだし（強制的に）」

おかげで防御魔法もうまくなったしな?（ポッコにされたための防衛本能）

なにより掃除してるよりはこっちも楽しめてるし（遠まわしに今までは拷問だといっている）
別に気にしなくていいぞ?」

はやて

「今のもっと悪い事したような気持ちになっただわ……」

なぜ?

シグナム

「クロ、夜にまた行くぞ」

クロ

「は……い……」

今夜までに思い出を作っておかなきゃな……」

はやて

「まあ……がんばってな？」

クロ

「うん」

今日は町にでてガンブレードと色々回ることにした
お金はあるよ？

この前宝くじが当たったんだ！

しかも3万！

こらそこ、しょぼいって言うな

しょうもないとかしょぼいとか言ってる人は金銭感覚が麻痺してる
恐れがある

病院に行くことをおすすめする

そんな訳でその辺をぶらぶらすることにしたんだけど……

クロ

「ガンブレード」

ガンブレード

「なんですか？」

クロ

「これなんだと思っっ？」

ガンブレード

「ゴミですかね？」

ガンブレードの意見はゴミか……

クロ

「俺には違うものに見えるなあ」

ガンブレード

「なんですか？」

クロ

「そりゃ……」

見たとおりの……

クロ

「やばい人たち？」

パンチパーマの人

「お前らなに喋るとんねん！」

リーゼントの人

「はよ金ださんかい！」

皆さんわかりますか？

怖いおじさん達に絡まれてるんですよ

え？冷静？

そりゃあ……

クロ

「なんでお金出さなきゃいけないんですか
何もしてないですよね？」

パンチ（ry

「通行料じゃ！」

リーゼン（ry

「やからはよ出せ！」

この人たちよりシグナムさんのほうが100倍怖いよ……

一応身体能力高いからね？

ホントウデスヨ？

ミセマシヨウカ？

不負腐怖斧……

リー・パン

「はよせんと殴るぞ！」

クロ

「うるせえ！こちらとらてめえらより怖い人に毎日ボッコされてんだ！
怖くもなんともないわあ！！！」

あの人に勝てる一般人なんかいねえよ！

一般人からしたら最恐の人だよ！

リ

「こんのがキヤ……！」

パ

「いてこましたるわあ!」

クロ

「うるせえ!」(ゴン)(ク)

拳骨

クロ

「第一なんなんだよ!

なんで関西弁なんだよ!

普通、こう、なんか、違う、あれだ……

あゝドチキシヨウ!」

日ごろのストレス爆発

クロ

「いいか!(ゴス)てめえらごときに遅れをとってたらな!(ガス)

」

まずはリーゼントから顔面に入れてすぐフック

クロ

「俺はとっくに死んでるんだよおおおお!(カキーン)(ク)

パンチパーマにアッパー

クロ

「わかったらとつとどこかに行きやがれ!」

リーゼント

「くそ！覚えてろよ！」

パンチパーマ

「てめえの家に行つてやるからな！」

クロ

「それはやめろ！」

掃除が大変だから！

リーゼント・パンチ

「あばよ！」

いったか……

ガンブレード

「マスターが1人で勝つたところ始めてみました」

クロ

「あ、そこなんだ？」

キレイとこじゃなくて

クロ

「まあいいか……」

さて、どこ行こうか？」

ガンブレード

「久しぶりに翠屋のケーキが食べたいですね」

その日原因不明の雷が1つ鳴り響いたそうなの

クロ

「ガフ……」

ガンブレード

「すみません……マスター……」

クロ

「いや、もういいよ……」

早く帰って帰ろう」

ガンブレード

「はい」

この時、これから向かう場所ですなにか起こるのか2人は知らなかった

第十三話 サンドバック (後書き)

向かう場所は翠屋

そこに居るのが誰か……

わかりましたか？

わかると思って書いてます

どんな目にあうかはまだ決めてませんけどね

ついでに時期は一回目の交戦のあとぐらい

だと思っ……

番外編というなお知らせ、ちゃんと聞いてよ？(前書き)

ちゃんと聞いてくださいね？
皆さんの協力が必要ですから

番外編というなお知らせ、ちゃんと聞いてよ？

作者

「てな訳で番外編だよ」

クロ

「いきなりなんだよ

まさか……」

作者

「そう！知ってる人は知っているあれの報告ともう一つのことだよ
！」

ガンブレード

「あれというとあれですか……」

作者

「うん、『これからこの作品にピンクを導入する』ってやつだ」

クロ

「マジでやめてくれよ」

他の作品のオリ主みたくなりたくねえよ」

作者

「だまらっしゃい

お前に拒否権は無い！」

クロ

「マジカ……」

作者

「マジだ

そしてこれは仲がいい作者の皆様とチャットをして決めたことなので、「やめてくれ!」って感想がこない限りやめない!」

ガンブレード

「といっってもどうするんですか?

いくらマスターがイケメンでもこれからフラグを立てるのは難しいですよ?

性格はあれですし……(ボソツ)「

クロ

「聞こえてるぞ」

作者

「とりあえず、空白期でフラグたてて、StSで修羅場にするつもりだ」

クロ

「ああ……もういいや……かつてにやっつけてくれ……」

クロさんがログアウトしました

作者

「さて、いままでののはただの前置き
本命はこれ!」

『クロにフラグ立てられてなのは達と激戦を繰り広げるヒロインの
募集』

ガンブレード

「てっきり私がマスターと結ばれるものと思ってました」

作者

「ん？なにいつてんの？」

ガンブレードも争奪戦に参戦するよ？」

ガンブレード

「……それは冗談ですか？」

いや、冗談ですよね」

作者

「マジ」

ガンブレード

「……………は？」

作者

「だからマジだって

これから君はクロをめぐって行われる激戦に参加するんだよ」

ガンブレード

「なんでですか

なんであんなダメなマスターを奪い合う戦争に参加しなきゃいけないんですか」

作者

「君が居ると面白そうだから」

ガンブレード

「もういいです……」

勝手にしてください……」

作者

「うむ、今回はやけにあっさりOKをもらったがとりあえず今回の応募はこちら！」

『クロにフラグを立てられるキャラ募集！』

・別に男性でもOK

・登場は空白期、またはStsからになります

・名前、性別、性格、容姿を記入した上でメッセージで送ってください

・クロにフラグがたった後正確が変わる恐れがあります

・この人いたら面白そう、という作者の判断で決定します。私や他の作者様、決定されたキャラへの迷惑行為、罵倒などはおやめください

・参加資格とかはありません

・まりもでもOKだ

・リアルで友達に聞いたりしてそこから決めたりもするかもしれない

作者

「以上！」

ガンブレード

「無駄なのがある気がするんですが……」

作者

「気のせいだと思え！」

ガンブレード

「あるんじゃないですか……」

作者

「とりあえず！なのはやフェイト、はやても参戦しますから、それなりに強くないとゲームオーバーになりますからご注意ください！」

ガンブレード

「はあ……もういいです……」

作者

「皆さんの応募待ってます！」

ガンブレード

「本編ちゃんと進めてくださいよ？」

作者

「ワカッテマスヨー

チャントシマスヨー」

ガンブレード

「はあ……」

作者

「安心しろよ、ちゃんとStsまで終わらせるから」

ガンブレード

「読者様を待たせないようにしてくださいよ？」

作者

「モチロンサー

募集期間は適当！いいのが決まったら終了！
みなさんよろしく！」

ガンブレード

「協力してやってくださいね」

作者

「お願いします！」

番外編というなお知らせ、ちゃんと聞いてよ？(後書き)

はい、てな訳で募集します

人数制限？ナニソレオイシイノ？

では待ってます！

第十四話 失敗×成果×交戦（前書き）

タイトルがハンター×ハンター ー風だけど気にしないでください
さて、どうなることやら
どうぞ

第十四話 失敗×成果×交戦

俺とガンブレードは翠屋についた瞬間引き返すことにした
なぜかって？

簡単だ、どこかでみた緑の紙のロンゲの女の人が中に居たからだ

クロ

「危ない危ない……………」

ガンブレード

「そういえばここって奈埜霸さんの両親が経営してましたね」

なのはの字が違うようなあってるような……………」

クロ

「とりあえずまずいことになったな……………」

ガンブレード

「はい……………」

クロ・ガンブレード

「「これから翠屋のシュークリームが食べられないじゃないか!」「」

大好きだったのに……………」

クロ

「残念だ……………」

まさかこんなことになるとは……………」

ガンブレード

「仕方ないですよ
戻りましょうか」

クロ

「うん、そうしよう」

シャマル

「あら？早かったわねえ」

クロ

「翠屋に行こうとしたんだが……
ホワイト・デビルの両親が経営してたのを忘れてた……」

シャマル

「そうだったの？
じゃあ手伝ってくれない？」

クロ

「なにを？」

シャマル

「これ」

そういつて出したのは弾丸

クロ

「いや、ちょっと鉄砲玉は勘弁願いたいです」

シヤマル

「違うわよ

なんの鉄砲玉よ」

冷たくあしらわれた

クロ

「え？もしかして薬？」

シヤマル

「違うわよ

こうやって魔力を込めるの」

(キイイイ……………)

おお……………

クロ

「わかりました

やってみます」

弾丸を握り、意識を集中

さして弾丸に魔力を込めて(ボン)「あつう!?!」

爆発しましたよ!?

シヤマル

「あらあら……………」

もう少し手加減しないと

普通は必要ないんだけどね……………」

ああ……………そういえば魔力だけが多いんだっけ？無駄だけど……………
なんでこんな体なのやら……………」

クロ

「じゃあもう一度……………ふっ！……………できた！」

シヤマル

「早いわねえ

じゃあ後よろしくね」

クロ

「え？」

シヤマル

「私は休んでるから」

ナンダッテー

そりゃないよシヤマルさん……………
しばらくやっていて気がついたこと
数が増えていつている……………
なぜか、その答えは簡単

ガンブレード

「〜」

となりでガンブレードが上機嫌で次々と同じものを作り上げていつている

いや、要領はガンブレードが作った物のほうが上かな？
これはガンブレードが作るのをやめない限り休めないな……………

で、夜

なんとか終わったと思ったたらロリっ子から呼び出し

なんか知らないけどややこしいことになってるからこいとのこと

クロ

「なんで俺を呼び出すんだよ……………」

このごろ寝不足なのに……………」

ガンブレード

「仕方ないですよ

マスターは使いやすいですから」

どういうこっちゃねん

要するに俺はパシリに向いてるってか？

まあもと居た世界ではパシリでしたよ？ええ
なにか？

クロ

「とりあえず向かうか」

すぐそこだけど

ガンブレード

「あれじゃないですか？」

あれだね

100パーセントあれだね

だって赤い衣装のロリっ子が宙に浮いててその隣に褐色のムキムキが浮いてたら間違いないでしょ
ザフィーラと一緒にだって言ってたし

クロ

「お〜い、ヴィータ〜ザフィーラ〜」

ヴィータ

「おせえ！」

クロ

「すまん！

で、状況は？」

ヴィータ

「囲まれてる

でもこいつら弱いぞ」

そうかいそうかい

クロ

「今こそ！シグナムさんとの修行の成果！
発揮するとき！やあああああああ！」

職員A

「はっ！」

クロ

「ぐへえええええ！」

ヴィータ

「弱い！」

クロ

「めんぼくねえ……………」

強くなりたいとはじめて願った瞬間だった

ヴィータ

「ん？離れていくぞ……………」

ザフィーラ

「上だ！」

え？上田？

クロノ

「はあ！」

なんか振ってきたー！

クロ

「俺が防ぐ！」

ガンブレード！」

ガンブレード

「了解

シールド！」

カツコE!なんかカツコE!
なにあれ!?なのはとフェイト!?
たくましくなつて……お兄さんうれしい! (寝不足ハイ
テンション中)
にしてもかつこいいなあ
あの2人がならんで立つと

クロ

「よし!おもしろくなってきた!」

ガンブレード

「そうですね

またマスターの情けない姿が見れますし」

おいおいひでえな

クロ

「今日の俺は一味違うぜ!」

ガンブレード

「本当に一味しか変わってませんがね」

うるひゃい!

クロ

「おお!?!新しい変身!?!」

よし、移動して近くで見よう

こういうのは最初以外はあっさりやっちゃうから見れないんだよねえ

記念記念

クロ

「おお！何が変わったのかわからない！」

まあいいか

(ズバン！)

クロ

「アベシベし！！」

上から何か降ってきた

いや、紫色の雷とともにシグナムさんが振ってきた

シグナム

「む？なにをしている？」

クロ

「踏まれています

あなたに」

シグナム

「そうか……………」

あれ？

……………ああ、フェイトのほうを見てるなあ……………
やっぱりあれかな？ライバル意識ってやつかな？

なのはさんはヴィータのほう見てるし、アルフはザフィーラ？
同じ狼だからかな？

クロ

「と、いうことは………(キリッ)

あまりものsか………
あ、クロノがどっかいった
つてことは………

クロ

「ユーノ！」

ユーノ

「!?!君は！」

クロ

「久しぶりだな！
元気してたか？」

ユーノ

「ああ、でも君は敵じゃないのかい？」

クロ

「いや、何言ってるんだよ
俺たち心友だろ？」

さあ！共に語らおうじゃないか！

ユーノ

「………すまない、記憶に無い」

………そうか………

クロ

「そうかそうか
ならば！ガンブレード！」

ガンブレード

「了解

手出しは？」

クロ

「無用！

いくぞユーノ！

思い出すまで戦ってやる！」

ユーノ

「よくわからないけど、探索の邪魔をするなら容赦はしないよ！」

さて、どうやって戦おうかね？

ユーノっおいんだよなあ……………

第十四話 失敗×成果×交戦（後書き）

はい、ユーノと交戦開始です
さて、クロは勝てるのか！？
そして描く勝負の行方は！？

原作見ながら決めます

はい

では次回を乞うご期待！

あ、前の番外編で話してたあれ、Stsくらいまで続けるんでよろしく願いますね

第十五話 はっはっは、チート？わかってる（前書き）

勢いで本日二話目

一日で二話目投稿したのいつ以来だっけ……

まあ今回はいいできだと思いますよ（最後のほうだけ）

ではごっげー！

第十五話 はっはっは、チート？わかってる

(ドガア！)

クロ

「グツハア！

くっ！やるな！」

ユ一ノ

「いや、まだなにもしていないんだけど……」

うるさい！

俺だって壁にぶつかることぐらいあるわあ！

シグナムさんとの修行の成果！

それは！

クロ

「この驚異的スピードを自在に操るこの俺についてくれるか！？」

そう！ついに扱いきれるようになったんだ！

いや〜逃げてるうちにいつの間にか……ね

ユ一ノ

「え？今の自滅は……」

クロ

「なんのことだ？さっぱりわからん
いくぞ！」

ユーノ

「！はあ！」

クロ

「グバアアア！」

(ガン！)

結界にぶつかった……

あれ？シャマルがクロノにチェックメイトされて……あ、

クロノ吹っ飛んだ

あれ誰だ？見たこと無いんだけど……

まあ、助かってるのかな？

ユーノ

「はあ！」

クロ

「危なっ！？」

今はこっちに集中しよう

どうなったものかわかったもんじゃない！

クロ

「まったく……危ないだろ！」

ユーノ

「！……防御したほうがよさそうだな……」

ん？なに？俺が攻撃するだけでも？はははは

俺は攻撃には向いていないよ？
え？後ろ？

（クルリ）

なあにあれ？

なんかダークな感じの雷が結界に当たって……あ、ヒビが入った

これでれるんじゃない？

クワ

「もしかしてシャマルかな？

よし！でれるやつ（ズドオオオオオオ）なんてこつたああああああああああ！！！」

非常に痛いです！

死にたくなるくらいに痛いです！

ガンブレード

「マスターは死ねませんけどね」

クワ

「何ちゃっかりシールド張ってんだクリア！」

ガンブレード

「仕方が無いですよ

無傷で住むためには私1人が限界です」

クワ

「そんな殺生なあああああ！！！」

そこで意識は途絶えた
さすがに鍛えた体でもこれはきつい

はい、ご都合カット

クロ

「う・・・うん？」

今果てしなくうつつとうしいものが居たような・・・

ガンブレード

「目が覚めましたか？」

クロ

「ここは？」

ガンブレード

「シグナムさんが運んでくれたんですよ
弟子だからって」

シグナムさんええ人や・・・！！

シャマル

「はい、すみません。なんとあやまっていますやら・・・」

あれ？

クロ

「シャマルどうした？
てかみんな暗いな」

ガンブレード

「今日は皆さんでお鍋を食べる予定だったらしいんですよ」

わお、初耳だ

クロ

「そうだったのか……..
遅くなったからはやっておこってるんだろっつなあ……..」

あれで結構寂しがりやだからなあ……..
なんで知ってるか？

なんか、シグナムさんから聞いた

ガンブレード

「とりあえずマスターはもっと強くならなきゃいけませんね」

クロ

「うん最低職員くらいは倒せないとな」

Aにボロ負けだったし

クロ

「がんばろっつ」

ガンブレード

「はい、がんばってください」

うん、がんばろう
さて、シグナムさんは・・・・・・・・ベランダでなんかシャマルと話
してる・・・・・・・・
自主トレかな？

クロ

「ガンブレード、どうにかしてトレーニングする場所作れない？」

ガンブレード

「簡単ですよ

ちよっとまっけてください・・・・・・・・できました」

はやい！アイテムクリエイト能力でもあるかのように早い！

ガンブレード

「アイテムクリエイト能力があるのですぐにできあがりました」

あったんかい！（まだテンションが高いまま）

ガンブレード

「INといえに入れますよ」

クロ

「え？IN？（ギョーン！）ああ！？」

すいこまれた

ガンブレード

「この中では向こうで一時間が過ぎるうちに一日が経過します
修行にはもってこいのはずですよ」

いや、それより……

ガンブレード

「あ、年老いたりとかは気にしないでくださいね
逆浦島にはなりませんから」

そうではなく……

クロ

「もつがもがが（引っこ抜いてくれ）もがもがもがもが！
ピクンのようにな！」

髪の毛以外は全て地中なんで

ガンブレード

「何言ってるかわかりませんよ？」

クロ

「もが（いや）もがもがが！（お願いします！）もつがもがも
がもががもがが！（窒息死する前に抜いて！）」

ガンブレード

「よく言えました」

同じだけどね

(スポン)

ク口

「ふう……………ありがとう」

ガンブレード

「どういたしまして」

ク口

「さて、強くなるためにはどうすればいいかな？」

シグナムは修行あるのみの的な発言してたけど

ん？そういえばそもそもなんで修行し始めたんだっけ？

あ、シグナムに強くなれって言われてか……………忘れてた
ん？そもそもなんで(略)

結論

俺が修行している理由ははやての命を救うため

ク口

「うわぁ……………重い……………」

ガンブレード

「ですね」

わかるのかよ！

てか思考読むな！

もうなれたけど

ク口

「でも闇の書のせいでそうならたら一旦バラしてシステム組みかえればいいのになあ」

ガンブレード

「マスター、今なんと?」

クロ

「え?だからバラしてシステムの組み換えを……………」

ガンブレード

「それでいきましょう!」

は?

クロ

「え?なに?できるの?」

ガンブレード

「私1人では無理ですが

あと1人天才がいればできますね」

ははは、ガンブレードに並ぶ天才なんて……………
1人いたっけ……………

ガンブレード

「早速事情を話して来てもらいますね」

行動が早いな

アリシア

「来ましたよ」

クロ

「早っ!？」

光超えたんじゃないか？

ガンブレード

「来ましたね、じゃあもろもろの説明を」

アリシア

「わかりました」

いった……向こうに

俺はうるさいのだろうか？

プレシア

「アリシア……いい友達ができて……うれしいわ」

クロ

「うお!?!いつの間に!？」

プレシア

「アリシアあるところにプレシアありよ」

それは子離れできていないだけでは……

プレシア

「細かいことはきにしないの」

この世界の女性はみんな心を読めるんですか？
まったく恐ろしい世界だ

クロ

「とりあえず、待ちますか」

プレシア

「そうね」

なんであんなまで？

プレシア

「暇だからよ」

さいですか………

第十五話 はっはっは、チート？わかってる（後書き）

てな訳で、闇の書はどうなるのか!?

はたまたフェイトにはれないのか!?

そしてプレシア一家は光を超えられたのか!?

プレシア

「元からスタンバってたのよ」

ばらさないでください

ではまた次回!

再び番外編 うれしかったから仕方が無い(前書き)

タイトル見た人へ

これを書き始めた頃は幸せでした……

ではどうぞ！

再び番外編 うれしかったから仕方が無い

Syura

「よし！今回も番外編！」

クロ

「多くないか？」

ガンブレード

「ですね

ここまで多いと読者が減るのでは？」

Syura

「いやね、実はね、これ」

クロ

「……………」

ガンブレード

「……………」

クロ・ガンブレード

「「は？」」

Syura

「祝！PV3000！ユニーク5000！！」

クロ

「いつのまに？」

Syura

「あと確認したらこれ書いてる前に日のPVとユニークが約3000と約450だった」

ガンブレード

「こんな駄作がこんなに読まれてるなんてびっくりですね」

Syura

「いや〜本当にここまでできたんだな〜」

で、感謝の気持ちもこめて何かやりたいんだけどどうする?」

クロ

「いやそれ考えとけよ」

Syura

「勢いで書き始めたのに考えてるわけあるかあ!」

クロ

「なぜキレル……」

ガンブレード

「ではちよつとしたエピソードなどはいかがですか?」

Syura・クロ

「たとえば?」

ガンブレード

「マスターに関連する友情話とか」

クロ

「ああ〜なるほど〜でもそんなのあるの?」

Syura

「考えれば無くもない」

しかしそれを書き始めたらやたら長くなる可能性が……」

クロ

「別にいいんじゃない?とりあえずがんばって今日中に書き上げる」

Syura

「そんな殺生な!他の小説も投稿しなきゃいけないのに!

1つはイメージだけはあるけど……」

ガンブレード

「まあやればできますよ」

Syura

「いや、そんな事いつでも……」

クロ

「いいからやれよ!やればできる!」

Syura

「うん、だから……」

クロ・ガンブレード

「「ファイトオー!」」

Syura

「いつから君達はそんなキャラになったんだい？
もういいよ……書くよ……でも本編もやらなきゃまずいから今日中
は無理かもしれぬ」

クロ・ガンブレード

「「ち！」」

Syura

「ちっ！つてなに！？ちっ！つて!？」

「これでもがんばってるほうなんだよ!？」

「今日中に他の小説も投稿してこの小説も投稿してたら20000文字超すわ!！」

クロ

「黙って書けよ」

ガンブレード

「それら作品の唯一の作者なんですから」

Syura

「はいはい！わかりましたよ！書きますよ！

「はあ……今日は頭がどうなるやら……」

Syuraが退室しました

クロ

「さて、どつなることやら……」

ガンブレード

「さあ？わかりませんね」

クロ

「ただ1つわかるのは……」

クロ・ガンブレード

「原作は無視して作るって事だね！」
（時系列やらなんやらのに）

再び番外編 うれしかったから仕方が無い(後書き)

はい、てなわけです！

今日中に四話ぐらい書かなきゃなあ……

第十六話 最終決戦、前日（前書き）

遅れてすみません！

本当にすみません！

活動報告でも謝罪しましたが、ギターを習いに行く日だということ
を忘れてまして……

本当にすみませんでした！

クロ

「とりあえず……」

ガンブレード

「あっちいきましょうか？」

では逝ってきます

第十六話 最終決戦、前日

ガンブレード

「では、今から改造を始めます
準備はいいですか？」

「……………はい!」「……………」

アリシア

「ではまず……………」

ただいまガンブレード& amp; アリシア& amp; 管理局のメカニックによる闇の書改造作業が行われています
こうなった理由は一週間ほど前にさかのぼる

ガンブレードとアリシアは2人で数時間考え込んでいた

クロ

「暇だな

UN やるつぜ、プレシア」

プレシア

「いいわよ

でも私強いわよ?」

クロ

「上等」

さあ！今UNが始まる！

ガンブレード

「ではこれでいきましょう」

アリシア

「そうですね

これなら闇の書も暴走せずになおかつ迅速にことを進めることができますからね」

ガンブレード

「ではマスター

早速ですが管理局に行つて協力を依頼してきてください」

しゅーりょー

始まっても居なかったのに……orz
つて、え？

クロ

「今なんと？」

ガンブレード

「ですから管理局に協力を依頼しに行つてきてください
プレシアさんに行けば何とかかなると思いますし」

クロ

「ええ〜……それ絶対O H A N A S I フラグじゃん……」

ガンブレード

「いいから行ってきてください
それともここでずっと生活しますか？
外に出るためにはあるキーワードを言わないと出れませんよ？」

クロ

「ありがたく逝かせてもらいます」

うん、誤字じゃないはずだ

プレシア

「じゃあアリシア、行ってくるわね」

アリシア

「はい、早めをお願いしますね」

で、管理局

へ、向かう途中のちよっとしたやり取り
これ大切
多分……

クロ

「そっぴやアリシアってさ」

プレシア

「なによ？」

クロ

「あんたから聞いてた人物像とかなり違ってたんだが……」

プレシア

「そうかしら？」

今でもかわいい笑顔だし、甘えてくれるし、病気にならないように
って作りたての薬をくれたりするわよ？」

クロ

「それは前半親ばか後半実験対象にされているだけな気が……」

プレシア

「どうでもいいわ

早く行きましょう」

管理局

なのは

「あ、フェイトちゃんのお母さん！と……クロさん……ちよつと」
つちに來てもらおうの」

オワタ

そのときはそう思った
しかし！

プレシア

「ちよつとまって

この人は大事な用できたの
リンディーさんを呼んでくれるかしら？」

なのは

「む、ちょっと怪しいけど……」

うん！呼んできます！」

うんうん、なのはさんもまだまだ子供だねえ……かわいいところもある

あとでいい子いい子してあげようかな？

魔王砲がこないことを祈って

そのあとリンディーという人と話をして、しばらくプレシアと拘束されつつO H A N A S I I されつつ待っていたらOKがでて……

現在に至る

にしてもあれは……

プレシア

「どうしたの？変な顔になってるわよ？」

クロ

「いや、なんでもない」

決してO H A N A S I I の内容を思い出して恐怖していたわけじゃない

プレシア

「あら？終わったみたいね」

早い！フィーレーサーもびっくりの早さだ！

ガンブレード

「あとは最後の作業ですね」

え？

アリシア

「私達の魔力を注いで防衛システムを起動、そして八神はやてさんに闇の書の主人格を説得してもらえば」

ガンブレード

「主人格が姿を見せるはずなのでそのつながりを切れば主人格と体の切断ができるはずです」

アリシア

「そこを一旦こちらのデバイスに主人格を保存、そして総攻撃してモンスターを排除」

ガンブレード

「これで闇の書の中の主人格は守られ、なおかつ闇の書から暴走するシステムを削除できるはずです」

交互に説明してくれるのはいいんだが……

首が痛い……

クロ

「先生、質問です！」

アリシア

「はい、って誰が先生ですか」

クロ

「闇の書に主人格なんてあったんですか？」

アリシア

「はい、少し中を見てみてもらえらしきデータが発見されました」

ガンブレード

「ですが、それを術者の意思で切り離しができるようにしておきましたので安心して攻撃してください」

クロ

「へえ、ところで何をやったの？」

アリシア

「魔力での干渉です」

ガンブレード

「私達の魔力だけでは足りないので管理局の方にも協力していただきました」

管理局の人たちは魔力貰うだけだったのかよ……
なんかかわいそう……

リンディ

「ちょっといいかしら？」

ガンブレード

「なんですか？」

リンディ

「魔力を注ぐって危険は無いんですか？
なのはちゃんの前例がありますし……」

アリシア

「ああ、それなら大丈夫ですよ」

ガンブレード

「ちゃんとリンカーコアではなく、魔力を吸収するようにしましたから」

そこまでできるならなぜ主人格をはがさなかったんだ？
疑問だ……

ガンブレード

「では皆さん準備をして明日またここで」

アリシア

「しっかりとデバイスの調整はしておいてくださいね？
総攻撃で消滅させるので負担がかかりますから」

そんなに本気でやらなくてもいいんじゃない……

シグナム

「ついに主を救うことができるのだな……」

シャマル

「そうね……」

ヴィータ

「よかった……よかった……！」

ザフィーラ

「……………」

あの四人は本当にはやてが大事なんだなあ

うん、俺もがんばろう

でもどうしようかな？

ガンブレードが居ないと主人格の保護はできないだろうし

かと言ってそれだと俺は役立たず以外のなんでもなくなるし……

どうしよう？

クロ

「シグナムさん」

シグナム

「どうした？」

クロ

「明日までに高威力の技を覚えたいです
教えてください」

シグナム

「簡単だ、気合でできる」

こんな人だったっけ……

なんか俺とあってすぐはこんな人じゃなかった気がするんだけど……
もしかして俺のせい？

クロ

「じゃあ明日までにがんばって新技作ります」

基本は前にユーノに教えてもらったし、ユーノデバイスなしで強い
からなあ……

俺にもできるだろう！

それぞれが準備をして明日に備える

そんなときにクロは新技を作ろうとしていた
魔法の原理を無視して

第十六話 最終決戦、前日（後書き）

Syuraだったもの

「……………」（ビクン、ビクン）

クロ

「これで懲りたか？」

ガンブレード

「さあ？まだやったほうがいいかもしれませんね」

Syura

「うう……………月光、回復たのむ……………」

月光

「かしこまりました」

クロ

「あ、確かお前の使い魔だっけ？」

Syura

「うん、超できる人で、ガンブレード級に役に立つよ」

ガンブレード

「とりあえず、反省の色が見えないので……………」

みなさくん

Syura・クロ

「「え？」」

シエリア

「なんだか久しぶりの出番ですねえ」

シャルン

「私もです」

魔王

「そうか、なら制裁を与えよう
このバカにな！」

アリア

「皆さん元気ですねえ」

Syura

「Sな方々+1!?!」

魔王

「誰が+1だ誰が！」

よし、このバカは殺そう」

Sな方々

「「「同意」」」」

Syura

「Aaaaaaaaaaaaaa!?!」

クロ

「では皆さん、作者はご覧の通り赤いもんじゃ焼きにしておきます
ので安心を」

そして無計画な作者ですいませんでした！
これからもこんなバカやらかすと思いますが、そのときは拷問器具
など送ってやってください」

S y u r a

「やめるー！ー！」

ガンブレード

「マスター、手伝ってください
月光さんも」

クロ・月光

「了解です」

S y u r a

「そんなバカなー！ー！」

(グチャン！)

決戦前夜 真夜中の説明会（前書き）

遅くなつてすいやせんつしたあ！

受験勉強がきつくて……

では言つこともないんでござ

決戦前夜 真夜中の説明会

クロ

「おやすみ〜」

なのは

「おやすみなさ〜い

もしこの部屋から一歩でも出たら警報がなるようにしてるから出ようとしないでね」

はいみなさん……こんばんは？

ただいま管理局の一室に居ます

ここで寝ることになったんですが、さっきの話のように警報装置がついてらしくて自由が聞かない状態

まあそれがなくても

クロ

「この拘束解いてくれない？」

なのは

「ダメなの」

ギッチギチです。はい

どこから情報を得たのかいつかの誰かにやった縛り方だし……これマジで動けねえ……

なのは

「じゃあガンブレードさん、クロさんの監視よろしくね〜」(シユン)

なのはさんはどこかへいった

クロ

「ガンブレード、もう寝ようか
起きてても何も出来ないし」

ガンブレード

「そうですね」

ついでにガンブレードは人型

なぜか俺より信頼されてて俺の見張り係

さて、寝るとしますか……

Z Z Z……

クロ

「ん……ふぁ……

………「じじじじっ」

目が覚めると真っ白な空間に居た

S y u r a

「やぁやぁクロくん！

お目覚めかナアバア！？」

クロ

「とりあえずここはどこなのかと、ここにつれてきた理由をはけ」

S y u r a

「ぐふう……いいパンチだ……」

じゃなくて、ここはお前の精神世界、そしてここにつれてきた理由は他でもない

読者の皆さんが訳わかんなくなってる可能性があるから説明をするためにここに送り込んだ！」

クロ

「で、なにを説明するんだ？」

S y u r a

「とりあえず、ガンブレードとアリシアが闇の書をどうしたかあと、それぞれのキャラたちの設定だな」

クロ

「じゃあサクツと行け、サクツと」

S y u r a

「もちろんそのつもり！」

ではどうぞー！」

闇の書の状態について

・ヴォルケンスはガンブレード達によって切り離され、今ははやての使い魔的な状態

・魔力の吸収はリンカーコアでなくてもよくなり、さらに相手の特徴を受け継ぐこともなくなった（今までの蓄積済み）

・切り離れた直後にデバイスとして使えるような改造を施されている

S y u r a

「闇の書に関してはこれぐらい？」

クロ

「お前……なんてことに……」

S y u r a

「まあ原作にかぶってる部分あるかもしれませんがね」

クロ

「？原作？」

S y u r a

「ああ、君は気にしなくていいことだよ
じゃあ次！」

オリキャラ、原作キャラ（一部）の設定

- ・ガンブレードはリンカーコアが存在し、魔力は自分で出すことも出来るがクロから受け取って蓄積したりもできる
- ・ガンブレードは常にクロさんの魔力と同等の魔力なのはクラスを持っている（状態がよければ最高二倍）
- ・アリスアのデバイスの中に例のやつ等（番外編参照）が入っており、一体つつ出すことができる
- ・アリスアは普段は例のやつ等の技を使って戦っている（超強いよ）
- ・プレシアさんはノリで魔王砲を撃てる

S y u r a

「こんなもんかな！」

クロ

「まてえええい！！！！！！！」

S y u r a

「どした？」

クロ

「プレシア強すぎだろ！？？」

ノリで魔王砲！？？どんだけ強いんだよ！」

S y u r a

「あの人は肺癌さえなければお前など塵になっていたぐらいの力を
持っているのだ！」

そしてノリで打つけど何回もはさすがに撃てないよ？」

クロ

「それでもすごいよ！？？」

S y u r a

「今日はここまで！」

ではクロよ！逝って来い！」

クロ

「おう！ん？字に違和感が……」

S y u r a

「死ねば起きるっていうよなあ？」

クロ

「え？なんで魔法方の準備を！？
ちよっ！？突きつけないで！？」

S y u r a

「おっはよっ！いまあっす！！」

クロ

「A a a a a a ! ! !」 (ジュン)

クロ

「はあっ！？」

ゆ、夢か……」

こうして俺は最悪の目覚めと共に最終決戦へと準備を始めるのだっ
た

決戦前夜 真夜中の説明会（後書き）

おわかりいただけただろうか？

訳の分からない設定が他にも幾つか存在する！

そしてそれを皆さんが知っているかどうかは無視して最終決戦へ！

クロ

「やめえいい！！」

グボア！

ガンブレード

「ではまた次の話で会いましょう」

最終話 にしたかったけど遅くなりすぎるのはどうかと思ってとりあえず投

最終回にしたかった……

そして新たな物語を書きたかった……

でもとりあえずクロさんには酷い目にあってもらっ

クロ

「ネタバレはダメだろ？」

いつものことだから皆さんわかってるはず

クロ

「え？」

じゃあはじまるよ

クロ

「俺の立ち位置って……」

ガンブレード

「変わってませんよ？」

クロ

「ちくしょー……！」

最終話 にしたかったけど遅くなりすぎるのはどうしかと思っ
てとりあえず投

なのは

「クロさん？大丈夫？」

クロ

「ああ…大丈夫…うっ!？」

ガンブレード

「マスターって乗り物苦手でしたっけ？」

クロ

「いや…ちょっとこの空間とこの先に何かあるかを考えると気分が
……………」

今は海に向かって車で移動中

本当に気分が悪い……

この後どうなるかが怖いからかな…………

ガンブレード

「？この空間の何が気分を悪くしてるんですか？」

クロ

「メンバー……………」

()()()(ピクッ)()()()

はやて

「今なんか言ったかなあ？」

なのは

「ちよつと聞こえづらかったからもう一回言ってもらえるかな？」

フェイト

「大丈夫、非殺傷には設定しておくから」

ヴィータ

「まあ死にかけるぐらいにはなるとは思っけどな？」

ガンブレード

「でも安心してくださいね？マスター」

五人そろって

「……………一瞬で終わるから」「……………」

はいはいきましたよー

これは降りるまでの延命治療をしなければ…………

せめて…せめて長く生きたい…………

クロ

「ご、五人とも？」

今は車の中だから降りてからね？」

五人

「……………ああ、それもそうだね」「……………」

ふう、延命治療成功

なんか今日は妙に冷静に判断できるなあ……………

もしかして今日死ぬとか？

……ありえるかもなあ……

リンディー

「ついたわよ」

海に到着

そういえば海に来た理由だけど、ガンブレード& amp・アリシア先生いわく、

『多少のスペースがないと危ない』だ、そうだ

一体何があるのやら……

ガンブレード

「マスター」

クロ

「ん？どうした？」

五人

「……さっきの、覚えてるよね？」「」「」

選択を誤った、せめてこの戦いが終わったらにすればよかった

クロ

「いや、これから最後の戦いが始まるんだからその後でもいいよね？」

五人

「……大丈夫 君なら耐えられる！」「」「」

ガンブレード

「マスター、いつまで寝てるんですか？
早く起きてください」

クロ

「え？いや、もうこの小説は終わって……あれ？」

普通にベッドの上……

クロ

「ああ……生きてるってすばらしい……」

ガンブレード

「マスター、頭の薬を用意しましょうか？」

ガンブレードはネックレスの状態だ

とりあえずガンブレードは今日も絶好調のようだ

クロ

「いや、大丈夫
ギリギリで」

ガンブレード

「そうですか
なら行きますよ」

クロ

「え？どこへ？」

ガンブレード

「寝ぼけてるんですか？それとも素ですか？」

今日は闇の書の防衛プログラムを滅多打ちにする日でしょう」

クロ

「何そのワンサイドゲームの香りがする祝日……」

ガンブレード

「そうじゃなくて私達がするんですよ」

クロ

「ああ…：そういうえばそんな話もあったようななかったような……」

ガンブレード

「しっかりしてください

マスターも戦闘に参加するんですから」

クロ

「え？そうなの？」

ガンブレード

「とりあえず医者を呼んできますね？」

クロ

「なぜ医者！？？そしてこの状況でどんな医者と呼ばつと…？」

ガンブレード

「マスターがすっかりしてないからでしょう
あと医者はもう呼びましたよ
デイリーサービスです」

クロ

「わぁデイリーなんて便利ねえ、じゃなくて！
医者ってどんな医者」「魔法少女ただいま参上！」「なるほど、
ポッコにされる前に真面目にやれと
はいはいわかりました。だからそのデバイスをおろしてください」

なのは

「ええ、せつかく着たのに残念だねフェイトちゃん」

フェイト

「そうだねなのは」

君等仲がいいねえ

そしていつからそんなSな性格になった

なのは

「目の前に獲物がいたらそりゃあ誰でも獲物を狩りたくなるよ」

クロ

「うんうん、君本当にガンブレードみたいになってきたね」

フェイト

「なのは…母さんがみんな待ってるから早く来てだつて」

なのは

「ふえ？フェイトちゃん今無線使ってた？」

フェイト

「ううん、母さんとは心でつながってるからわかるんだ
母さんがそう言うおまじないかけてくれたんだ。機械で」

こっちもこっちでサイキックに目覚めてるよ……

つかあの母親は自分の娘に何をしたんだ

クロ

「じゃあとりあえずプレシアに殴られる前に行こうか
他はともかく俺は殴られそうだから……」

なのは

「じゃあゆっくりでもいいね」

なのは、君はいつからそんなにいい笑顔で人をいじめることができるようになったんだい？

僕は君のお兄さんに報告に行きたいよ

クロ

「じゃあとりあえず行k（ズン！）ゴフウ！？」

いつの間にか人型になっていたガンブレードのゲーが腹にめり込んでいるのが見えた

ガンブレード

「マスターはしばらく寝ていてくださいね」

薄れる意識の中でガンブレードに質問した

なんか俺ってこんな感じのことよくあるけどなんでだろう？

クロ

「なん……で……」

ガンブレード

「ノリ？」

ノリですか……

俺は意識を失った

「……ター……ター……て……マス……きて……マスター……！」

クロ

「ほうわあ！？なんだ！？敵襲か!?!」

ガンブレード

「今から最終決戦でしょう

何度も言わせないでください」

クロ

「ああ、ゴメンゴメン

腹部の激痛と夢の中と同じ状況だったのどで軽くボーっとしてた」

ガンブレード

「夢の中の状況？」

クロ

「それは……いや、やめとく、同じ結果になったらいやだから」

ガンブレード

「?なにやら激しく起こったほうがいいような気がしますが……
今は大事な戦いの前なので見逃してあげましょう」

クロ

「ありがたき幸せ」

とりあえずフラグは踏み倒したZ E

回収してたらB A D E N Dになるからね

クロ

「とりあえず皆無事で帰ればいいね!」

ガンブレード

「あたりまえじゃないですか、何が何でも死者は出しませんよ
それにあいての強さは今まで吸収した魔力の持ち主の強さの合計み
たいなものですから楽勝です」

クロ

「十分に無理ゲーだけどガンブレードのが吸収されてなくて本当に
よかったと今実感した」

ガンブレード

「まあ起動するときに注ぎますけどね

そのときは力までは吸収されませんから安心してください」

クロ

「そりゃ安心だ

「こっちはチートじゃすまない位の奴がゴロゴロいるからね」

そう、このときは信じていた

ガンブレード

「でも全力で行ってくださいよ？」

勝率は70%ぐらいなんですから」

信じていたんだ

クロ

「十分じゃね？」

誰も犠牲にせずに勝てると

ガンブレード

「ついでにその30%はマスターが色々足を引っ張った場合です」

クロ

「俺責任かよ……」

じゃあ俺は後ろで待機？」

足を引っ張らないように後方待機がいいかな？

それとも海に浮かんでいようか？瀕死の状態で

ガンブレード

「いえ、マスターには一番重要なポジションについてもらいます」

クロ

「え？一番重要？」

さっきと言ってることが違いますよ？ガンブレード先生？

クロ

「ガンブレードも間違っこともあるんだな……
よしよし、最終決戦の前にメンテ受けような」

今までは自分で出来てたけど……

ガンブレード

「マスターが脳外科に行ってください
そして別の脳と入れ替えてもらってきてください」

クロ

「酷いね……
で、俺の役目は？」

ガンブレード

「マスターは前で戦う私やなのはさん達の魔法が届く範囲で待機しててもらってます」

そのどこが重要やねん……

技避けるときに邪魔になるだけとちゃうんか

ガンブレード

「まあ、主な役割としては皆さんの盾ですね
不死身のスキルを最大限に活用した役割です」

ようするにあれだな？

俺に盾になれってことだな？

クロ

「ガンブレードは？」

みんなを守るならガンブレードのほうがいいでしょ？」

どうだ

ガンブレードの作戦を上回る完璧な作戦だ

ガンブレード

「私は皆さんと攻撃に回ります

できるかぎり一撃で終わらせたいんで」

うわぁ……

敵がかわいそう……

ん？ちょっと待てよ？

クロ

「一撃で終わらせるなら俺の意味ないんじゃない……」

ガンブレード

「ですから、それでもしも終わらなかった時になど、

撤退するときの盾としてマスターには動いてもらいます」

クロ

「死ねと申すか」

ガンブレード

「死なないでしょ？」

クロ

「そうだけど……」

解せぬ

ガンブレード

「まあ、アリシアさんやプレシアさん、あとプレシアさんのご友人も手伝ってくれるそうですから、大丈夫だと思いますよ？」

あの人の友人とか絶対に強いし、アリシアってあのかわいげのないあの子でしょ？
他になのはやフェイトとかも加わって……

クロ

「伝説の超野菜人もびっくりの勢力だね」

ガンブレード

「プロ（ツコ）リーでは勝てないでしょうね」

さすがはガンブレード
よくわかってる

クロ

「まあネタらしきものは置いて……
そこまでの勢力があってなんで倒せないかもしれないのかね？」

ガンブレード

「（ゴウウ！）相手はマスターの魔力も吸収していますからね……
もしかしたら不死のスキルを持つてるかも知れないですよ」

なんで熱気と冷気のハーモニーがエグイ魔法を打ち込まれたのかわからないけど、
とりあえずなんで勝てないかも知れないのかはわかった

クロ

「うんうん、勝てない時は100%向こう側が強すぎるからしょうがなく撤退して、
勝てる時は塵も残らないわけね」

ガンブレード

「殆どあってますが、1つだけ違うところがあります」

クロ

「なん…だと？」

あってるよね？

ワンサイドorワンサイドであってるよね？

……ああ、表現が間違っただのかな？

ガンブレード

「負けたらマスターのせいですわってことです」

クロ

「なぜ!？」

ガンブレード

「なんで相手が不死のスキルを持つてる可能性があると思ってるんですか」

え？確か……

はやて家に行つて、名前を間違えて、ボッコボコ……

クロ

「あのミスが世界の命運を分けているのか……？」

ガンブレード

「そうですね？」

「やっと気づいたんですか？」

これはテヘペロではすまないから+で後頭部を相手が泣くまで殴打しよう

これで解決できると聞いたことがある

クロ

「とりあえずこれで最終決戦でなにをすべきかと、その理由はわかった……」

「いよし！やるぞおー！！」

ガンブレード

「それはダメです」

クロ

「え？」

ガンブレード

「プレシアさんが警察の方のお世話になつていて、アリシアさんが説得しているのもう少し時間がかかるそうです」

もうあの人がお騒がせてレベルじゃねえ……

最終話 にしたかったけど遅くなりすぎるのはどうかと思ってとりあえず投

次回！

感動のラスト！！（の予定）

また先延ばしになると思うけどね

最終決戦は最後まで考えてないから途中が長くなりそうなんだよね

……

ガンブレード

「それまでの過程と同じ長さになるかもしれませんがね」

……言い返す言葉がないよ……

クリスマス特別番外！

クロ

「今日はクリスマス！」

ガンブレード

「雪降る聖夜！」

Syura

「輝く雪にお熱いカップル！」

クロ・ガンブレード・Syura

「『小説家になろう』にお越しの皆様！メリー・クリスマス！！」

」

クロ

「いや、クリスマスだよ！

雪降ってるよ！」

Syura

「リアルでは降ってないんだけどな

まあ小説の中だしいいじゃん！」

ガンブレード

「で、なにかプレゼントはないんですか？」

Syura

「え？」

クロ

「おお！そうだよな！小説のなかだからサンタさんはこないし！
変わりに作者であるお前がなにかくれるんだよな？」

Syura

「いや、ちよつと待て！」

三人娘

「くれないの？」「くれないの？」

Syura

「俺にはそんなプレゼント買う予算なんて……って！
てめえらどっからやってきた！？」

はやて

「プレゼントってきいたらそれはなあ？」

なのは

「私達もプレゼント欲しいよー！」

フェイト

「もちろん私達にもくれるんだよね？」

Syura

「いや！待て！」

俺の財布にはコズミックブレイクに課金するためのお金と遊びに行
くためのお金しか入ってない！」

クロ

「金はあるんだな」

ガンブレード

「みたいですね」

なのは

「じゃあ早速買いたい」

フェイト

「そうだね、なのは」

はやて

「何買ってもらおかなあ」

Syura

「え？え？

いや〜〜！！」

ガンブレード

「マスター、何を買ってもらいました？」

クロ

「俺か？俺は魔法の教本買ってもらったよ
もっと強くなりたいからな

ガンブレードは？」

ガンブレード

「私は……秘密です？」

クロ

「嫌な予感しかしない……」

なのは

「フェイトちゃん！はやてちゃん！
何かって買ったの？」

はやて

「私はケーキ買ってもらったん
後でシグナム達と食べよう思ってた？」

フェイト

「私は服を買ってもらったよ
なのはは何を買ってもらったの？」

なのは

「私？」

「私はこれ！」

はやて

「ん？なんや？」

フェイト

「それ、レイジングハートだよね？」

なのは

「うん！また強化してもらったんだ！」

フェイト

「え！？なのはだけじゃない！」

はやて

「そんなずるい子は……」

「こつやあー!」

なのは

「ふえ!?! ちょ、ちょっとはやてちゃんやめてよぉ〜!」

Syura

「ははは……皆さん楽しそうですねえ……」

ああ……財布が……薄い……」

クロ

「あ、そうだ」

ガンブレード

「どうしたんですか? マスター」

クロ

「いや、俺達だけプレゼント貰うのもアレだから

みんなにもプレゼントを届けなくちゃと思ったんだよ」

Syura

「え」

ガンブレード

「ああ、それいいですね」

Syura

「ええ!?!」

そ、それって俺持ちじゃないよな!？」

クロ・ガンブレード

「「そうだけど……何？断るの?」「」

Syura

「いや……もう……本当に金ないから……」

クロ

「マジ？困ったな……」

ガンブレード

「どうしましょうか？銀行でも襲います?」

Syura

「だめだよ!？」

法だけは犯しちゃいけないよ!？」

????

「なら私に任せてください」

クロ

「ん？あ、月光」

月光

「お久しぶりですね」

Syura

「おお、設定上俺の使い魔で結構何でもできる妖術の達人である月光じゃないか」

ガンブレード

「なにかいい手があるんですか？」

月光

「はい、銀行強奪だめだ！」は冗談で
これを使ってください」

クロ

「これは？」

Syura

「え！？ちよつとまで！！」

月光

「私とマスターで溜めた貯金です
全部使ってくれて構いませんよ」

Syura

「いや〜！！」

クロ

「おお！じゃあ早速買いにいつて配るか！」

ガンブレード

「そうですね！」

Syura

「ああ…なんかもういいや……」

クロ

「おーい！はやて！フェイト！なのはさん！手伝ってくれー！」

なのは

「何々？何を手伝うの？」

フェイト

「何かやるんですか？」

はやて

「何をやるんや？」

クロ

「これから買い物に行くぞ！

他のみんなに配るプレゼントを買いに行くんだ！」

はやて

「え！？ほんま！？

じゃあシグナムたちに何買ったるかな？」

フェイト

「アリシア姉さんや母さんにも買ってあげなくちゃね」

ガンブレード

「さあ、行きましょー！」

その夜、クロ達はみんなの家を回りみんなにプレゼントを配って回

りました

S y u r a

「俺の金が…貯金が……」

月光

「マスターは金の亡者ですか？

あきらめたほうがいいですよ？」

S y u r a

「誰のせいだ！

もういいよ…先に家に帰っててくれ……」

月光

「そうですね？

じゃあ先に帰ってますね」

S y u r a

「はぁ……

俺の金が………」

アルミナ

「どつしました？」

S y u r a

「ん？ああお前か……

お前もプレゼント目当てか？

じゃあお前には今までブレブレだったキャラ設定をやるっ………」

アルミナ

「いや、ありがたいですけど、何があったんですか？」

Syura

「いたいけな少年少女に絞られた……」

アルミナ

「中学三年生で絞られてどうするんですか……」

「じゃあこれから一緒にどこか食べにいきませんか？」

Syura

「金ないんだけど？」

アルミナ

「おごりますよ？」

Syura

「姉さんと呼ばせてください……」

アルミナ

「やめてください！」

「じゃあ行きましょうか！」

Syura

「おう……」

クリスマスの夜、みんなみんなプレゼントを貰い、みんなが幸せになり、楽しい時間をすごしました。それは何者にも変えがたい宝物となって、みんなの思い出となりました。

そして、この世界のほかでも

Syura

「なあ……」

アルミナ

「どうしました？」

Syura

「楽しいんだけどな？」

俺達だけ楽しいってのもあれだよな？」

アルミナ

「ああ……そうですね

誰か呼びます？」

Syura

「いや、じじいぢぢ

『Syuraプレゼンツ！この小説を読んでもあなたにも幸せを！』

「

アルミナ

「どじじいじじいですか？」

Syura

「いや、あれだ

ほら……あの……どじじいぢぢ……」

アルミナ

「考え無しですか……」

Syura

「はぁ……どっしょっしょっ？」

アルミナ

「まあいいじゃないですか

きつと皆さん幸せにしてると思いますよっ。」

Syura

「あぁ……そうだといいなあ

生きてるだけで幸せとかいうけど、結局楽しくなかったら生きてる意味ないしな」

アルミナ

「まあ、生きてることに、今の生活でつらいことがなければそれで幸せじゃないですか」

Syura

「みんながそう思えてるといいな」

この世界以外で幸せな人はたくさんいます

あなたはその一人になれていますか？

なれていないのなら

Syura

「好きなことやってみたら結構成功すると思うのは俺だけなのかな？」

アルミナ

「どろどろしょしょ」

一度、常識を捨てて、周りを見渡してみてもどろどろしょしょか？

Merry・X・mas

あなたが幸せでありますように

クリスマス特別番外！（後書き）

今あなたに大切な人はいますか？

今の生活に後悔はありませんか？

今、後悔があるのなら、

自分がしたいことをしてみてはいかがでしょう？

きつとそれを見守ってくれる人がいます

ではみなさん

ちゃんと頑張りますから見放さないでえ〜！！

一、悲しき母の努力（前書き）

今回から別の章に分けることに
理由は原作なんて寄せられるはずがないから
でも出来る限りがんばります！

そしてがんばれ母
いつか光が訪れる

一、悲しき母の努力

クロ

「そういえばガンブレード」

ガンブレード

「なんですか？」

クロ

「フェイトさんはプレシアさんからのテレパシーでここに来いみた
いなこと言われたんだよな？」

ガンブレード

「ああ、そうらしいですね」

クロ

「なんでプレシアさんがこの場に居ない？」

ガンブレード

「先ほどはやてさんが、

プレシアさんが友人迎えに行つて来るって行ってたけどどんな人な
んやろう？」

と、言っていました」

なるほど、迎えにいつて途中でやらかしたってことね

ん？フェイトさんもプレシアさんもいつの間にかさん付けか？

それはやっぱり恐ろしい目に以下略

なのはさんもうっかりしてたら怖い怖い

クロ

「なにやってんだか……
お？うわさをすれば」

来たよ来たよ来ましたよ？
そしてアレはなんですか？

???

「プレシア、小さい子ばかりだが……大丈夫なのかね？」

プレシア

「大丈夫よ、フェイトとアリシアが居ればほかがいなくても大丈夫
だし」

???

「それは安心だね」

ハデなおば（ジャキツ！）もといプレシアさんといかにももてます
見たいなイケメンらしき人が来たよ？
そしてフェイトさん、その黄色く光る剣を降ろしてください

???

「ん？君がクロ君かね？」

クロ

「あ、はい」

なんだ？妙な感覚が……

???

「私はスカリエツティ、ジェイル・スカリエツティだ」

クロ

「あ、よろしくお願ひします」

……あれ？なんか会ってはいけない人にあつた感じがする……な
ぜだ？

クロ

「ところで何で遅れたんですか？」

プレシア

「あなたが敬語なんて君が悪いわね……
まあいいわ

それはアリシアに変な男が近づいてきたからよ」

クロ

「変な男？」

プレシア

「そうよ？」

全身青色の服を着ていて、青い色の帽子を被っている2人組みよ
建物から出てくるなりアリシアに話しかけてきたから軽く吹き飛ば
したのよ」

なるほど、それは大変だ

プレシアさんは悪漢から娘を守ろうとしたんだね
でも話を聴くに……

クロ

「吹き飛ばしたのは警察ってことでおk?」

プレシア

「アリシアやフェイトに近づく者は皆敵よ」

話が通じない……

クロ

「アリシアさん、そういうことでおk?」

アリシア

「ええ、母が警察を吹き飛ばしたので母と同じように脳の情報をいじっておきました」

クロ

「へえ〜……へ?」

アリシア

「ちよつとばかり脳の回路をいじって私の巫女服が普通に見えるようにして、」

何事もなかったようにしたんです」

クロ

「いやいやいや!

そこじゃなくて!

何!?今プレシアさんの頭の中をいじくってたって言わなかった!?

アリシア

「ええ、母は妹や今の私のことはあまり好きではないようだったの
で癌を治したときについて」

クロ

「どんなついで!？」

そして聴く限りでは家のデバイスも関連してるんですが!？」

ガンブレード

「ああ、そういえばそんなこともありましたね」

クロ

「軽いよ!？」

人一人にえらいことしちゃったよ!？」

アリシア

「大丈夫ですよ

私達娘が好きで好きでたまらないっていう記憶を植えつけただけですから」

クロ

「いやいやいや!

娘一人のために世界をボン!しようとした人だよ!？」

世界が滅ぶわ!君等二人のために!」

アリシア

「大丈夫ですついでに私の言うことなら何でも聴くようにしておきましたから」

クロ

「物騒だよ!それって君が命令したらどんなことでもやるってことだよね!？」

物騒極まりないよ!」

アリシア

「大丈夫ですって

あ、母さん」

プレシア

「なに？アリシア、何でも言ってる？」

声のトーンが違う！？

あれか！？普通のとくと電話にできるときの話かたが違うあれか！？
近頃のおば…女性に多いあれか！？

アリシア

「ちょっと解析や情報の整理をしたいのでノートパソコンを5台ほど買ってきてください
五分以内で」

プレシア

「わかったわ、任せてちょうだい」

パシリ！？

しかもスケールが並じゃねえ！

アンパンとかでも1000円単位なのに10万近くいったんじゃねえ！
？いや、下手したら100万届くよね！？

アリシア

「あ、ついでに一台100万以上でないと嫌ですよ？」

プレシア

「もちろんですよ、いつもどおり買ってくるわ」

500万いったあ!!

さらにいつも通りだと!?

大丈夫なのかテストアロッサ家の家計!!

アリシア

「いきましたね……」

さて、費用は母さんの食費と小遣いから差し引くとして」

プレシアさああああああん!!

アリシア

「ん?それでも足りませんね……」

こいつ…!

かなりハイテクな機械もってやがる!!

なにこれ?手帳みたいな薄さと大きさを後ろに254TBって書いてるよ!?

何その要領!?!多すぎるでしょ!?!

アリシア

「さて、テレビでも見ますか」

ワンセグ機能付き!?

アリシア

「やっぱり地デジはいいですね」

地デジだった!?

アリシア

「あ、でもYouTubeで動画でも見ますか
いいのがあったらロードしておきましょうかね？」

動画サイトもいけるの!?

アリシア

「あ、でもやっぱり株の動きでも見ておきますか
出費が重なりといけませんからね
家計簿も……赤字ですし」

株の動き見れるの!?

しかも家計簿それ!?

もうそれでパソコンいらないんじゃないの!?

プレシアさんは何のためにジェット機もびっくりの風を起しながら
電化製品やまで走ったんだ!!

プレシア

「アリシア…買って…きたわよ……」

息も絶え絶え!!

アリシア

「ありがとうございます
では早速……」

おお、五つ同時に起動した

アリシア

「では……」

腕まくりしてるよこの子……
どんなことやるうとしゅ（ゴシヤア！）プレシアさんのご飯と小遣
いが粉々にいいいいいい！！

クロ

「え！？ちよっ！！何してんの！？」

アリシア

「ストレス発散です

100万以上するパソコンを壊すのは爽快ですよ」

クロ

「庶民な私には考えられませんか！？」

「というか心臓が痛いよ！胃がキリキリ言ってるよ！！」

アリシア

「まあいいじゃないですか

母さんのご飯と小遣いだけで私のストレスが発散されるんですよ？
安いものです」

クロ

「いやいやいやいやいや！！

高い！高すぎ」「あなたアリシアに意見するの？」「いえ！なんでも
ごさいません！！」

だからそのいかにも親ですからって感じの紫の光を放つ剣をおろし
てください！！

プレシア

「まあいいわ」

スカリエツティ

「君のところはいつもこう騒がしいのかい？」

クッククック……さぞかし楽しい日常なんだろうね……」

うわぁ……なんかやつかいそんな感じの人が増えた……

ガンブレード

「アリシアさん、準備はできてますか？」

アリシア

「ああ、問題はありません

母さんがパソコンを買ってくる間に情報整理は終わってますから」

プレシアさんがとにかくかわいそうだ……

アリシア

「あ、そうだ母さん

壊れたパソコンを片付けておいてください

あと飲み物」

プレシア

「もちろんよ」

それでいいのかプレシア・テストロツサアアアアアアアアアアア！

！！

そしてそんな叫び声を心の中であげている間に闇の書は起動された

そしてそれに気づいた瞬間俺は自分が吹き飛んでいるのに気づいた
その方向にはフェイトがいた

(ドグチャア!!)

激しい衝撃と共に意識は消え去った

一、悲しき母の努力（後書き）

プレシアさんかわいそう……

でも安心して、これからはクロさんのターンだから
なにかって？不幸なのが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1895u/>

魔法少女リリカルなのは～最弱の転生者～

2012年1月12日23時46分発行